

事業概要とまとめ

1. 事業の目的

若年性認知症は、高齢者と異なり働き盛りや子育ての時期に病気を発症し、就労支援や生きがいとしての活動を必要としている。また、進行予防のためのプログラムも求めている。

本事業は、初期の若年性認知症の人が、認知症の進行を遅らせ、生きがいとしての仕事の間を活用できるようにすることを目的に、就労支援のアセスメント表の実用化、人材育成のためのスーパーバイズや研修、企業との協働セミナー、居場所づくり、認知症予防のプログラムの試行を行うことを目的に以下の事業を行った。

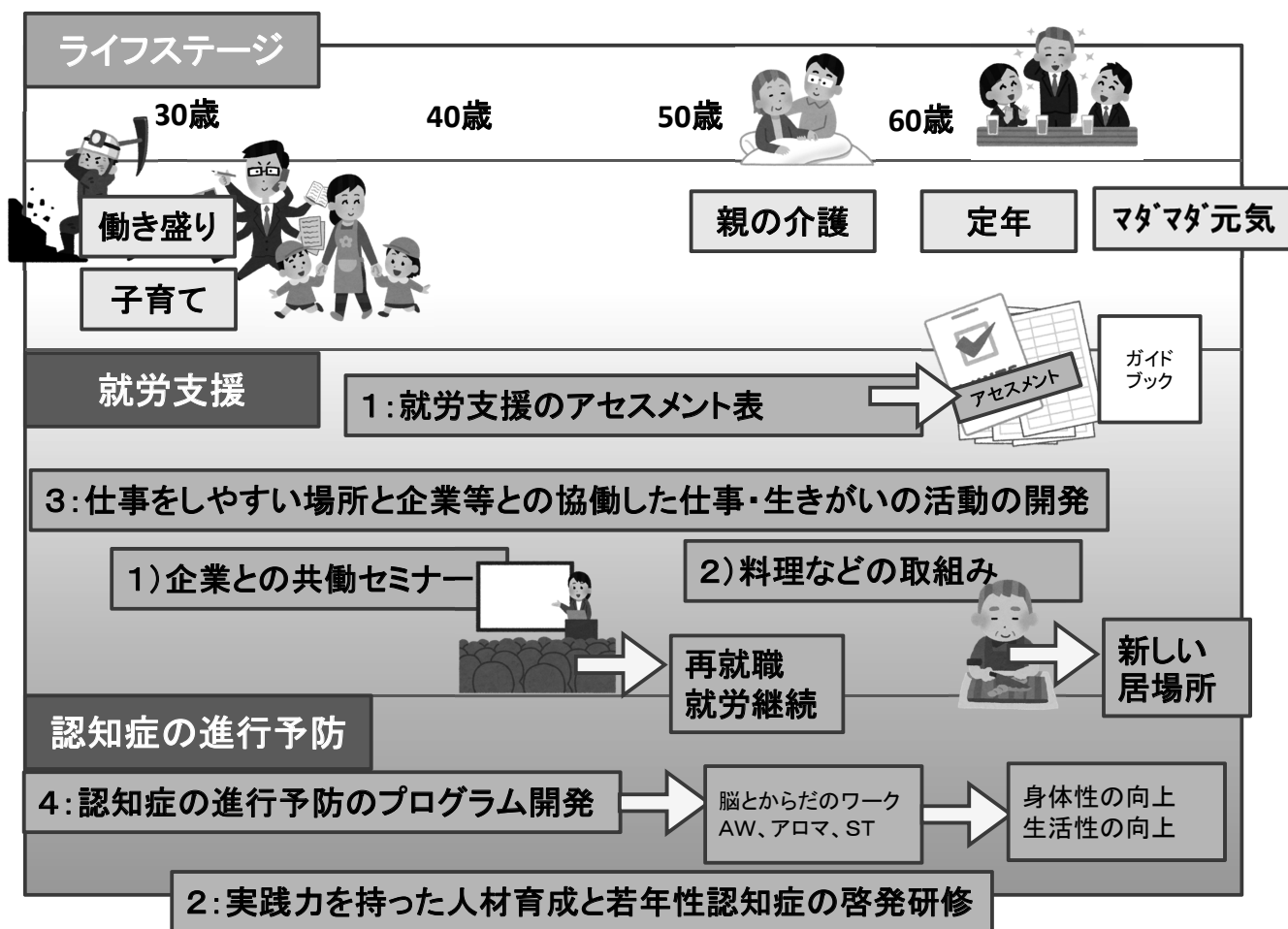
2. 事業内容

柱立て1：若年性認知症の就労支援アセスメント表の試行と実用化

柱立て2：実践力を持った人材育成と若年性認知症への啓発研修

柱立て3：仕事をしやすい場所と企業等と協働した仕事・生きがい活動の開発

柱立て4：認知症の進行予防のプログラム開発



4. 事業の効果と考えられること（詳細は、各報告参照のこと）

柱立て1：若年性認知症の就労支援アセスメント表の試行と実用化

- ① 若年性認知症の人専用の「仕事に従事するためのアセスメント表」を青森、東京、名古屋、大阪、兵庫の若年性認知症の人への就労支援を行っている若年性認知症支援コーディネーターなどの協力を得て、それぞれの支援事例をモデルに記入してもらいアセスメント表の改良を行った。
- ② 使用しての疑問点などを参考に、ガイドブックを作成した。

柱立て2：実践力を持った人材育成と若年性認知症への啓発研修

- ① 若年性認知症の支援に特化した研修を行い、他の地域でも社会参加の場を検討されるようになった。

柱立て3：仕事をしやすい場所と企業等と協働した仕事・生きがい活動の開発

- ① 企業との共働セミナーにより、就労継続や再就職が可能になったケースがあった。
- ② 料理の活動を独立して実施できるベース作りを支援することにより、場を増やすことができた。

柱立て4：認知症の進行予防のプログラム開発

- ① 若年性認知症の人の生きがいとして参加できるプログラムを増やすことができた。
- ② 身体性の向上：体が動きやすくなってきた。
- ③ 生活の向上：介護保険の利用が進んだり、本人ができることを家族もスタッフも分かることで生活の質の向上がはかれるようになった。
- ④ プログラムの実施により要介護状態になることを遅らせ、認知症の進行予防が望めた。3年以上継続してタックに通えている人がある。

5. 残された課題

今後の若年性認知症の人の生きがいつくりのためには、

- ① アセスメント表を他の地域でも使いやすくするために、事例集など具体的な使用事例が必要である。
- ② 若年性認知症の人への具体的な支援方法の習得のためにプログラムを学ぶ研修や、実習の場が必要である。
- ③ 言語障害に対するサポートの事例やサポート方法を明確にする必要がある。
- ④ 行政や企業との共働により、就労支援に取り組む必要がある。
- ⑤ プログラムを継続し、自主開催できるようになる。
- ⑥ 多くの地域で適切な時期に介護保険などのサービスが利用できるようになる支援事例をまとめる必要がある。

6. 生きがいとしての仕事の場「タック」参加者の状況（2018年2月末の状況）

1) 参加者の属性

2017年4月から2018年2年末までに参加した認知症の本人は28人であった。

性別は男性20人、女性8人、年齢は40歳代1人、50～54歳5人、55～59歳6人、60～64歳9人、65～69歳3人、70～74歳4人であった。

原因の病気は、アルツハイマー型認知症が最も多く21人、次いで前頭側頭型変性症5人、脳血管性認知症1人、軽度認知障害1人であった。

住まいは、大阪市内16人、大阪市内12人であった。

家族構成とキーパーソンは、配偶者が最も多く21人、次いで親、独居であるが兄弟姉妹がキーパーソンがいずれも2人であった。

本人の属性

性別	人	%
男性	20	71.4
女性	8	28.6
年齢		
40歳代	1	3.6
50～54歳	5	17.9
55～59歳	6	21.4
60～64歳	9	32.1
65～69歳	3	10.7
70～74歳	4	14.3
原因疾患		
アルツハイマー型認知	21	75.0
前頭側頭型変性症	5	17.8
脳血管性認知症	1	3.6
軽度認知障害	1	3.6
合計	28	100.0

住まい	人	%
大阪市内	16	57.1
大阪市内	12	42.9
家族構成とキーパーソン		
配偶者	21	75.0
配偶者・子ども	1	3.6
親	2	7.1
独居兄弟姉妹	2	7.1
独居子ども	1	3.6
独居	1	3.6
合計	28	100.0

2) 参加者とプログラムの特徴

- ・一番若い参加者は、43歳であった。若い参加者である2人が、親がキーパーソンであった。
- ・若いほど介護保険サービス利用が可能になっても、同世代のつながりの場として「タック」の存在が重要であり、介護保険継続後も利用の希望がある。
- ・FTLDの中でも意味性認知症などの失語のある人は、言語療法を受けることにより、家族や関わる人がどのようにコミュニケーションをとるか工夫がわかり生活や就労支援につながる。
- ・脳とからだのワークは、大人数が参加でき、運動機能の改善もはかれた。
- ・カフェは、少人数で家族以外と過ごす場に慣れるために有効であった。
- ・独居者は、日常生活の支援が多くなると、タックだけでは支えられなくなる。

参加者（途中中止者も含む）

	事例	性別	年齢	疾患	住まい	キーパーソン	料理	くるみ	脳	ST	カフェ	AW
1	A	男	43歳	AD	大阪市外	親		1	1			
2	B	女	52歳	AD	大阪市外	親	1	1	1		1	
3	C	女	52歳	FTLD	大阪市内	配偶者				1		
4	D	男	53歳	AD	大阪市外	配偶者	1	1	1		1	1
5	E	男	54歳	AD	大阪市内	配偶者		1				1
6	F	男	54歳	FTLD	大阪市内	配偶者	1	1		1		1
7	G	男	55歳	AD	大阪市内	独居	1	1				
8	H	女	55歳	FTLD	大阪市内	配偶者・子ども				1	1	
9	I	男	56歳	AD	大阪市外	配偶者	1	1	1		1	1
10	J	男	58歳	AD	大阪市内	独居兄弟姉妹	1	1	1		1	
11	K	女	59歳	AD	大阪市内	配偶者					1	1
12	L	男	59歳	AD	大阪市外	配偶者		1			1	1
13	M	男	60歳	AD	大阪市外	配偶者	1	1	1		1	
14	N	男	60歳	AD	大阪市内	配偶者	1	1			1	
15	O	男	60歳	AD	大阪市外	配偶者			1			
16	P	男	61歳	FTLD	大阪市外	配偶者		1				
17	Q	女	62歳	AD	大阪市内	配偶者			1			
18	R	女	62歳	AD	大阪市内	独居兄弟姉妹		1				1
19	S	男	63歳	AD	大阪市内	配偶者		1	1			
20	T	女	63歳	FTLD	大阪市内	配偶者					1	
21	U	男	63歳	VD	大阪市内	独居子ども		1	1			
22	V	男	66歳	AD	大阪市外	配偶者		1			1	1
23	W	男	66歳	AD	大阪市外	配偶者		1				
24	X	男	67歳	AD	大阪市内	配偶者	1	1	1		1	1
25	Y	男	70歳	AD	大阪市外	配偶者	1	1	1			
26	Z	男	70歳	AD	大阪市内	配偶者	1	1				1
27	AA	男	70歳	MCI	大阪市外	配偶者	1	1	1		1	
28	BB	女	72歳	AD	大阪市内	配偶者		1	1			
合計							12	22	14	3	13	10

疾患（認知症の原因疾患）

AD：アルツハイマー型認知症 FTLD：前頭側頭葉変性症 MCI：軽度認知障害

VD：脳血管性認知症

プログラム（参加しているプログラム）

くるみ：くるみボタンを使った作業 脳：脳とからだのワーク ST：言語療法

カフェ：ぱーくすカフェ AW：アートワーク

3) 参加人数

参加人数は、基本的に日報から人数を把握しているので、スタッフのいない自主開催日には日報が抜けている場合があった。

月別参加人数は、1日平均、本人が4.3人～6.4人であった。家族、見学なども含めると最も多い月で1日7.8人の参加があった。

プログラム別でみると、自主開催、くるみボタン作業の日は、参加人数が少なく3～4人であり、料理は定員9人としているが休みなどがある。脳とからだのワークは、広い会場に移り実施しているので本人が6人～11人と多くの参加があった。

月別参加人数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
日数	16	16	18	16	17	16	17	15	15	14	14
参加人数											
本人	79	57	116	101	90	84	75	65	76	80	75
家族	1	2	12	2	5	9	15	7	11	7	15
その他	5	5	11	21	9	11	11	13	18	14	11
合計	85	64	139	124	104	104	101	85	105	101	101
1日平均											
本人	4.9	3.6	6.4	6.3	5.3	5.3	4.4	4.3	5.1	5.7	5.4
家族	0.1	0.1	0.7	0.1	0.3	0.6	0.9	0.5	0.7	0.5	1.1
その他	0.3	0.3	0.6	1.3	0.5	0.7	0.6	0.9	1.2	1.0	0.8
合計	5.3	4.0	7.7	7.8	6.1	6.5	5.9	5.7	7.0	7.2	7.2

プログラム別参加人数〔2018年2月〕

プログラム	料理	くるみ	脳	自主	くるみ	くるみ	カフェ	料理	くるみ	くるみ	脳	自主	くるみ	くるみ	くるみ	合計	平均
日付	2/1	2/2	2/6	2/8	2/9	2/13	2/15	2/15	2/16	2/19	2/20	2/22	2/23	2/26	2/27		
参加人数	7	5	11	4	4	5	4	6	3	4	6	3	5	3	5	75	5.4
家族	1	0	1	0	2	1	2	5	0	0	1	0	1	0	1	15	1.1
その他	2	0	2	0	0	0	1	2	2	0	1	0	1	0	0	11	0.8
合計	10	5	14	4	6	6	7	13	5	4	8	3	7	3	6	101	7.2

くるみ:くるみボタン作業 脳:脳とからだのワーク 自主:自主開催 カフェ:ぱーくすカフェ

自主開催では、お茶や作業の用意のみで、日報つけ、掃除は自主的に行ってもらった。

7. 家族アンケート

2017年7月に家族にアンケートを実施した。

返答のあった家族は、12人で配偶者が11人、親が1人であった。

本人が1人回答していた。

家族		N=12人
性別	男性	2
	女性	11
年齢	50－54歳	3
	55－59歳	5
	60－64歳	3
	65－69歳	0
	70歳以上	1
	不明	
本人との関係	配偶者	11
	親	1
	本人記入	1

本人		N=13人	
性別	男性	11	本人の状況は、男性が11人、女性が2人であった。
	女性	2	
年齢	50-54歳	4	年齢は50-54歳が4人、60-64歳が4人、55-59歳3人、65-69歳2人であった。
	55-59歳	3	
	60-64歳	4	
	65-69歳	2	
	70歳以上	0	
	不明	0	
病名	アルツハイマー型認知症	10	病名は、アルツハイマー型認知症が10人、前頭側頭型認知症2人、レビー小体型認知症1人であった。
	前頭側頭型認知症	2	
	レビー小体型認知症	1	
診断後年数	1年以内	2	診断後1年以上、2年未満の人が9人と最も多かった。
	1年以上	9	
	2年以上	0	
	3年以上	2	
要介護認定	未申請	8	介護保険も未申請8人であった。
	要支援1	2	
	要支援2	0	
	要介護1	1	
	要介護2	1	
	要介護3以上	1	
精神保健福祉手帳	持っていない	2	精神障害者保健福祉手帳は、11人が所持していた。
	持っている	11	
	3級	4	
	2級	3	
	1級	3	
	未記入	1	
タックへの参加	2014年	2	タックへの参加は、2015年からの人が最も多く7人であった。
	2015年	7	
	2016年	4	
タックへの通所携帯	1人で	11	タックへの通所は、11人が自分で通っており、ガイドヘルパーを使っていた人が2人、家族の送迎が1人であった。
	家族と	1	
	ガイドヘルパーと	2	
タックを利用して変化があったか	変化有	11	タックに参加して変化があった人が11人、変化がない人が2人であった。
	変化なし	2	

<家族の意見>

- ・自主開催の日も何か用意されている物がある方がいい。木曜日ヒロズカフェの場でランチを作って皆で食事する日は、楽しい様子。まとめて下さるスタッフの方が常にいて下さるのが理想。
- ・タックに行くことが生活の一部、支えになっているので、これからもなるべく長く元気に通ってくれればと思う。

柱立て 1：若年性認知症就労支援アセスメント表の試行と実用化

I 目的

2016 年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業で作成した「若年性認知症の仕事や介護保険利用サポートのために」（以下、就労支援アセスメントシート）の実用化を目的とした。

II 実施する内容

就労支援アセスメント表の実用化に向けて試行して、就労支援が行えるか事例検討を行った。検討の結果を再度就労支援アセスメントシートに反映させ、改善を行った。

III 会議録概要

1. 第 1 回全体会

日時：2017 年 6 月 19 日（火）10 時～12 時半

場所：法人事務所

出席：松倉典子（こころすこやか財団青森県若年性認知症総合支援センター）

鬼頭史樹（名古屋市認知症相談支援センター）

森文乃（兵庫県社会福祉協議会ひょうご若年性認知症生活支援相談センター）

岸田彰範（同上）

竹内さをり（甲南女子大学）

沖田裕子（NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター）

中村淳子（NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター）

杉原久仁子（NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター）

議事録要旨

- （1）自己紹介を行い、沖田から挨拶と本助成趣旨及び本会議の目的の説明があった。
- （2）当法人沖田から、今後のスケジュールの説明があり、各団体で試行する際は対象者の同意書を取っていただきたいことなどが説明された。
- （3）杉原から、シートの目的と作成経過を報告した。
- （4）出席者から以下の質問があり、検討を行った。
 - ・本シートを活用する場面とはどういったものか。
 - ・シート 4 はチェック型であるが、チェックだけでは本人のことが浮かび上がりにくいと感じる。
 - ・評価時に注意している点として「できる」の範囲。どの程度できるのか、手を出している範囲が人によって表現として変わっている。その範囲を一定にしないとブレが生じると感じる。
 - ・家族によっては「できる」の範囲を提示することに抵抗を感じられ、手伝っている部分があっても「できる」と言われることがある。
 - ・「できる」「できない」ということではなく、服薬ができていて病状が安定しているという意味で作成した。
 - ・現状アセスメントというよりも、A 型か B 型かどちらに行くのか条件アセスメントである。タックをベースに作られているため、地域にに応じているという点では、どこを視点に作成するのかは大切。アセ

スメントをメインにしたものを作成したほうが汎用性は高いと感じた。自分の活動の中では、ここまでの情報を得ることは難しいと感じる。

- ・就労支援は何段階かあると思う。就労か生きがい、これを使おうと思うと仕事をするのか、A型かB型かどちらに行くのかを検討するためのものと感じるが、どこに焦点を置くのか設定したほうが良いと思う。

- ・就労という環境にトライしてもらえそうかというシートと時間経過後にチェックできるシートがあると支援の方針は立てやすい。

- ・障害者の就労支援シートはある程度形ができてくるので、それはそれで活用できると感じる。若年性認知症の人はレベルが落ちてきたときに生きがいとしての検討が必要になる時期がある。今どの時期にあるのか、モニタリングできるとよい。

- ・シート3の間のところで、仕事を続けているが今後を迷っていて、どうするかという点が出てくると思うが、その狭間のところが見えるとよいと思う。

(5) 次回会議までに使用いただき、改善点を検討することで会議は終了した。

2. 第2回全体会

日時：2017年12月12日（火）14時～16時

場所：法人事務所

出席：松倉典子（こころすこやか財団青森県若年性認知症総合支援センター）

鬼頭史樹（名古屋市認知症相談支援センター）

森文乃（兵庫県社会福祉協議会ひょうご若年性認知症生活支援相談センター）

伊藤 耕介（東京都多摩若年性認知症総合支援センター）

竹内さをり（甲南女子大学）

沖田裕子（NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター）

中村淳子（NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター）

杉原久仁子（NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター）

議事録要旨

(1) 自己紹介を行い、当法人沖田から挨拶と本会議の目的の説明があった。

(2) 各出席者がシート試行の感想、気づいた点を報告し、意見交換を行った。

- ・生活支援の相談センターのため、活動の場がない。シート7以降は、活動の場がないので使用が難しい。

- ・本人の意向、家族の意向等を足してチェックできるようにするとよい。

- ・家族との関係などを記せるものがあるとよいと感じた。

- ・書いていて思ったこととして、就労支援ありきでの記載。生活状態なども記載できる場面があれば、なぜこの人に就労なのかが分かりやすいと思う。

- ・難しいと感じたのは、若年の場合、相談の幅が広い。一定のものに収めるのは困難。

一定の目的をもって、就労を考える人には適しているのではないか。

- ・シート4は、必要性ということを問うので、できていることをチェックするほうが書きやすいと感じた。強みを記載できるほうが書きやすい。

・シート6は、家族、本人に聞いているが、家族、本人の言葉をそのまま書くのか、記入者の意見を交えて記載するので悩んだ。主観だけだとアセスメントシートとして分かりづらいと感じた。

・シート8は、作業所のスタッフに聞きながら作成したが、4と重なる部分が多いと感じた。両方に同じことを書くのか、どうすれば良いのか悩んだ。作業の場づくりのシートだが、作業所としての場づくりなのか、現状やっている内容なのか、どちらを記載すれば良いのかでも悩んだ。説明があるとよいと感じた。

・配慮いただきたい点をチェックして、活動の場へ依頼する時にも使える。

・この人に合わせて場を設定するというよりも、ある場にその人自身が合わせられるようになっていくことが必要だと感じている。

・一緒に記載したことで、アドバイスすることができた。これをきっかけにして話し合いの場ができることは良いことだと感じる。

シート8の5の作業選びの基準を情報提供に使用するとすると、そこにこだわりがある人だということ伝えることができれば、通える場が優先順位として高くなるが、本人のニーズとして伝えることができることには意味があると分かった。

・シート8は、つけ方に迷った。それは他のスタッフも同じだった。どうつければ良いのか、とらえ方によるものと思えるが。作業する場としてとらえた場合と対象者にとってのということを考える場合とで、差が出た。

・シート4は、サポートの必要性があると思って○をつけるが、サポートが不要（できている）ためにチェックしているように感じる。できていることをチェックできると使いやすい。

・シート6は、記入しやすかった。項目ごとの対比が確認しながら記載しやすかった。サービスという意味の幅が広いために記載しにくいと感じた。サービス利用のサービスの意味については、それほど迷わなかった。

どのようなサービスもという意味でとったため、つけやすかった。

・シート9は、本人が必要性を感じているなどの表現のほうの方が分かりやすいと感じた。本人の強みが見えるほうがよいと感じる。

・シート2と3について、必要、活用しているなのか、が不確か。活用していることだけを書くとなぜ活用していないのかも記載していかないといけないので、分けると分かりやすい。

・シート3は、書き方として、スタッフが思っている必要か、家族が思っている必要なのかが分かりにくかった。本人に意向としては無いものもある。本人はやる気がないが、家族は働かせたいという意向で言われる場合もある。本人はできないことに気づいていて、働くことでできないことを露呈してしまうこと分かっている。今は他よりもできることで意味があると感じている。 家族と本人の意向がずれている点を書けるとよいと思った。

シート6は、家族と本人とのズレが見えるのが面白いと感じた。

（3）沖田からまとめとして以下を報告した。

・事例の病気一つとっても多様。若年性の方の就労支援という点だけでも、多くの視点を持っている。

・シート3は、作成したのが5年前のため、当時は薬も十分でなかった。当時と変化していると感じている。当時は、家族は危機感を感じているが、本人はそれほどでもなかった。 本人、家族と別に記載する必要がある。サービスにつながる点も含めて記載できるように考える必要がある。

・シート6はかなり進行している人を対象に作ったが、社会資源一般にも使えることが今回分かったと感じる。3のところは、ガイドヘルパーや介護サービスにつなぐという視点しかなかったが、就A、Bにつなぐという視点も必要だと感じる。「生活困窮窓口」的な窓口（市区町村によっても名称は異なる）もできている。社会資源の項目を変える必要はあると感じる。順番を変更する。

・悩むことは、今どのステージで、どの支援が必要かを関係者と共有することが難しいと感じる。以前は介護保険サービスにつながるということで良かったが、今は早い段階から関わっているため、複雑になっている。家族が働いている人とそうでない人とでも違う。若年性認知症コーディネーターは抱える訳にはいけないため、つないでいくスタッフへ共有するシートが必要。

・シート4はできることを記載するように変える。

・シート8と4をどのようにつなげて支援者につないでいくか。

・シート8について場の項目であるが、必要な内容とそうでないものを検討したい。シート4のほうが支援する時にどういうサポートがあればよいかを示すもので、8はもう少し具体的な支援を考える時に活用するか。実際に通うようになってから、8を使うなど。作業への取り組み状況を障害に応じて記載できれば良いが、病気の特徴があって、細かい点での記載となると難しい点もある。職場の方に教育できるツールになるとよいと思う。

・シート5-3はジョブベースづくりでは求めない内容になるため、削除する。ジョブベースづくりは一般やB型ぐらいまでにつなぐ人の面談に使用する。再評価にも使えるため、使用にあたっての留意点を冒頭に解説を記載する。

4. 今後の方向性について沖田から提案があり、出席者で確認を行った。

修正後のシートについてのご意見を伺う。

再利用いただくのではなく、確認してもらい意見をいただきたい。

シートは印刷して利用できるように考えている。

柱立て 2：実践力を持った人材育成と若年性認知症への啓発研修

I 目的

若年性認知症の利用者を適切にサポートできる人材の育成

II 内容

1. 若年性認知症の本人と家族のための支援 実践講座

各 5 講座の研修を 2 クール行った。

実施場所：大阪市社会福祉研修情報センター

第 1 回＜7 月 20・21 日＞

日程	研修テーマ	内容	講師	参加者数
7 月 21 日(金) 13:30～16:30	若年性認知症のひとと家族の求める支援 本人、家族の体験を聴く	若年性認知症の本人や家族から話を聴きながら、求めている支援について考えてみましょう。	沖田裕子	19
7 月 21 日(金) 16:45～18:45	本人の“出来る“をサポートする方法 中核症状を補う	出来ない事に注目するのではなく、出来ないことをサポートして“出来る”ことを増やしていこう！中核症状を補うサポート方法を具体的に学びます。	沖田裕子	17
7 月 22 日（土） 10:00～12:00	支援制度の理解を深める	若年性認知症の本人や家族のための支援は、介護保険の使い方にも工夫が必要です。また、障がい福祉制度や医療の活用方法を学んでいきましょう。	杉原久仁子	19
7 月 22 日（土） 12:30～14:30	本人交流会の進め方 本人同士の支え合いのために	本人同士のコミュニケーションの促進のしかた、居場所の作り方についてお伝えします。	沖田裕子	17
7 月 22 日(土) 14:45～16:45	認知症の人の心に寄り添う	認知症による記憶や認知機能の低下に伴い、感情の表現が変わっていきます。サポートする人がいかに理解して寄り添うことができるか考えます。	沖田裕子	15

第 2 回＜10 月 28 日・29 日＞

日程	研修テーマ	内容	講師	参加者数
10 月 28 日(土) 10:00～12:00	若年性認知症のひとと家族の求める支援 本人、家族の体験を聴く	若年性認知症の本人や家族から話を聴きながら、求めている支援について考えてみましょう。	沖田裕子 曾根勝一道、 曾根勝重美、 伊藤広美 下 蘭 誠	10

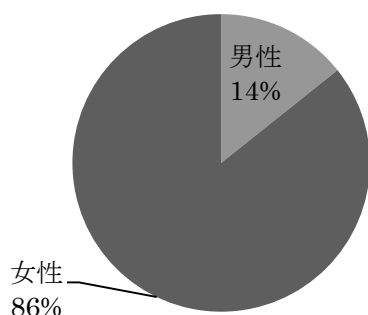
10月28日(土) 12:30～14:30	本人の“出来る“をサ ポートする方法 中 核症状を補う	出来ない事に注目するのではなく、出来ないことをサ ポートして“出来る”ことを増やしていこう！中核 症状を補うサポート方法を具体的に学びます。	沖田裕子	9
10月28日(土) 14:45～16:45	本人交流会の進め方 本人同士の支え合い のために	本人同士のコミュニケーションの促進のしかた、居 場所の作り方についてお伝えします。	沖田裕子	8
10月29日(日) 10:00～13:00	支援制度の理解を深 める	若年性認知症の本人や家族のための支援は、介護保 険だけでなく、障がい福祉制度などの活用が必要で す。その活用方法を学んでいきましょう。	杉原久仁子	15
10月29日(土) 13:45～15:45	認知症の人の心に寄 り添う	認知症による記憶や認知機能の低下に伴い、感情の 表現が変わっていきます。サポートする人がいかに 理解して寄り添うことができるか考えます。	沖田裕子	13

2. 受講者アンケート結果

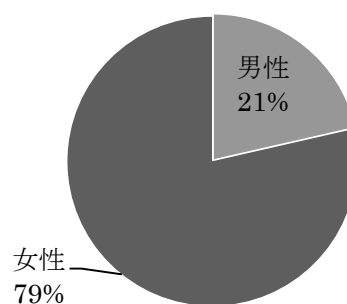
1) 受講者

受講総数は、1クール 87 名、2クールは 55 名であった。アンケートの回答者は、第1クールは 28 であり、2クールは 14 名であった。2クールとも男性が2割前後であった。

第1クール 性別

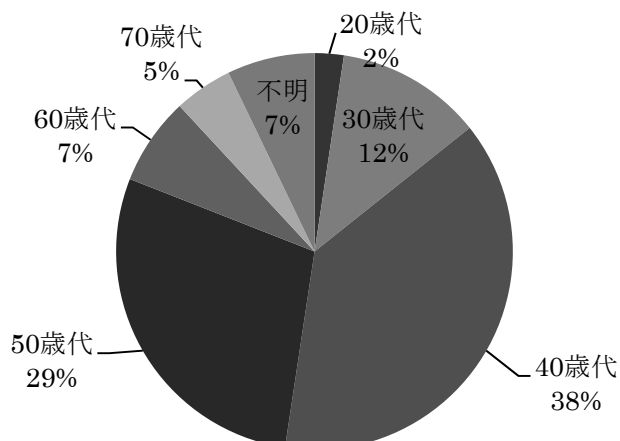


第2クール 性別



年齢については、第1クールは30歳代が1名、40歳代が12名、50歳代が9名、60歳代が2名、70歳代が2名であった。第2クールは20歳代が1名、30歳代が4名、40歳代が4名、50歳代が3名、60歳代が1名であった。

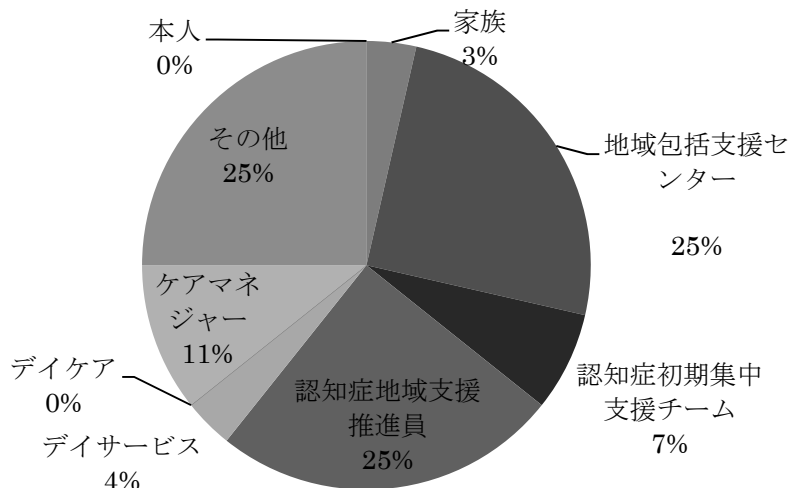
年齢 (第1クール 第2クール)



立場について
は、認知症地域
支援推進員、地
域包括支援セン
ターが最も多く
それぞれ7名で
あった。

その他として
は、グループホ
ーム関係者、
看護師、社協職員
当事者会関係者
などであった。

立場（第1クール、第2クールの計）



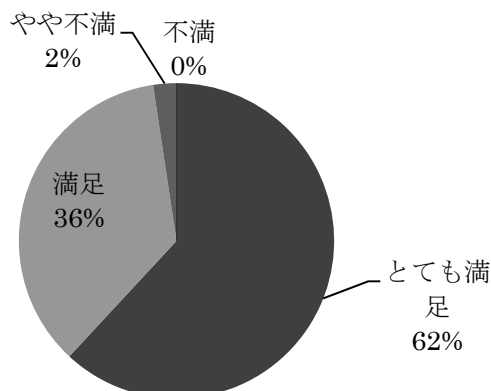
2) 研修の満足度

研修の満足度は、「とても満足」が26名、「満足」が15名であった。「やや不満」と回答した1名は、その理由として当日の台風による縮小などをあげていた。

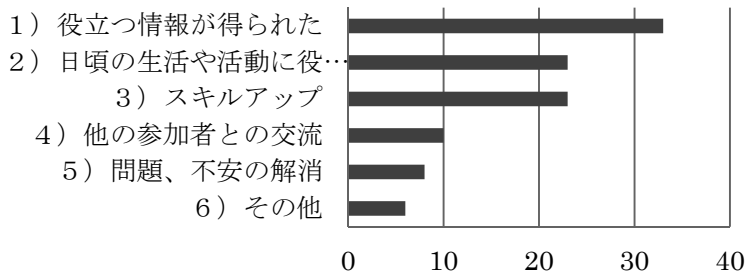
良かった点としては最も多かったのが「役立つ情報が得られた」33名であり、ついで「日頃の生活や活動に役立った」「スキルアップ」のがそれぞれ23名であった。

「良かった点」の自由記述では、「施設へ受け入れる際、家族や本人の思いがある事を意識しなければいけない」「家族の話を聞いて寄りそう気持ちを強められた」「本人や家族の話を聞いたこと心の寄りそい体験ができたこと」「地元に戻って拠点作り(居場所)が必要と思えた」「地域に戻り、伝える情報が得られた。今までの活動が正しかったことが確信できた」などの記述があった。

満足（第1クール、第2クールの計）

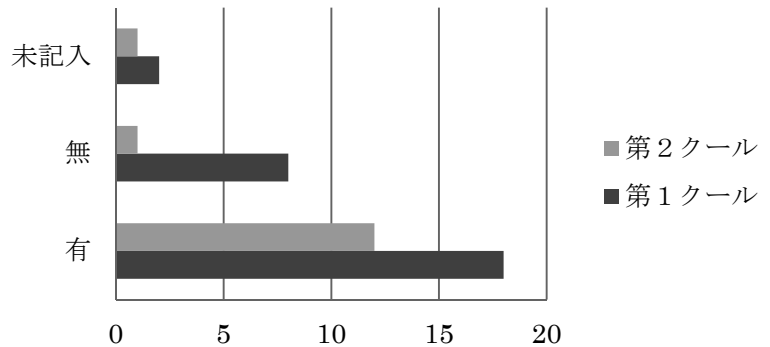


良かった点（第1クール、第2クールの計）



若年性認知症の支援経験

3) 若年性認知症支援経験は、
第1クールが、有 18 名、無 8 名
未記入が 2 名であった。第2クールは
有 12 名、無 1 名、未記入が 1 名であった
第1クールよりも、第2クールの方が
「経験有」と回答した割合が高かった。



若年性認知症の支援で困難に思ったことは、以下の様な内容であった。

- ・居場所。本人の活動範囲が狭くなっていくのが気になる。社会との交流が少なくなっている。
- ・支援の方法、症状についてのアドバイスなどわからなかった。自分で調べながら、研修を思い出しながらやっていた。
- ・内科の主治医が得られず、専門医に繋いでくれない。
- ・病気の進行の速度にとまどった。
- ・失語の方への対応がうまくいかない。考えを読む(理解)することが難しい。
- ・家族(親)の理解が得られない(当事者の思い、意志の尊重についてなど)。
- ・何とか家族だけでやて行こうとされ、他の人に頼ろうとしなかった。
- ・地域の人とのかかわり方(独居の人)。
- ・病院、治療の場での限られた環境の中で、その人のやりたい事や出来ることを見つけ支える事。
- ・介護保険サービスが続かない。
- ・グループホームで高齢の入居者と比べてどのような日常生活を送るか迷う。

居場所や社会参加についての意見が数多くあったが、疾病への関わり方や医療に関すること、家族や地域との関わり、介護保険サービスの利用について（入居系では、他の高齢者の方との関係）などの回答があった。若年性認知症の人と家族をとりまく問題は多岐にわたることが示唆されている。

4) 研修の感想

「とても共感できる内容が多く、また、今まで知らなかった認知症の方々の活動を知ることが出来た。奥様のお話もとても分かりやすく感動した。とても参考になった。色々な方の体験を聴くたびに、悩んでいるのは自分たちだけではないと勇気が貰える」「認知症の方の気持ち、感覚を少し理解でき良かった」「まず、自分が偏見を持っていないか見つめた。今後はキャラバンメイトとして出来る事、認知症サポーター養成講座の中で認知症を理解し、偏見を持たない人を増やしていきたい」「4月から地域支援推進員として働き始めている。若年性認知症の方や家族の方からの相談がなく、周知のやり方に問題があるのか？悩む毎日であるが、とりあえず、相談があった時に慌てずに(的確な情報提供等)相談にのることが出来るようにと申し込んだ。基礎的な事、色々学ぶことが出来良かった。体験によって自分自身の傾向(感情コントロール、リラックスしている事)を覚知し、認知症の人のサポートをする上で大事な事再確認できた。本人の交流会や言葉に出来ない人がリラックスする方法等やってみたい」など、本人や家族の声や体を使ったワークにより、改めて自分自身の考えを見詰めなおし、自分の仕事につなげていきたいという感想が多かった。

柱立て3：仕事をしやすい場所と企業等と協働した仕事・生きがい活動の開発

I 目的

企業や事業所等へ啓発を行うことを通して協働先を拡大することで、若年性認知症の人が仕事や生きがいが持てる適切な場を整備する。

II 実施する内容

- ・企業向けの若年性認知症啓発講座の開催
- ・若年性認知症の人に適した仕事や活動について協働できる企業や事業所の開拓
- ・具体的な取り組みの試行

1. 企業向けの若年性認知症啓発講座の開催

【協働先】りそな総合研究所株式会社

【経緯】若年性認知症の人に適した仕事や活動について協働できる企業や事業所を開拓するため、まず、企業や事業所等を対象とした研修会を開催することとした。開催にあたっては、できるだけ効果的に幅広く周知するとともに、協働を生み出す契機となるような働きかけが必要であった。そのため、多くの企業の会員を有し、他業種の協働を成功させた実績があるりそな総合研究所株式会社の協力を得て研修会を企画した。

【目標】若年性認知症の理解と、若年性認知症の人に適した仕事や活動について協働できる企業や事業所の開拓

【日時】平成29年7月24日（月）午後2～4時

【場所】りそな銀行梅田支店 プライベートサロン Re ラグゼ セミナールーム

【プログラム】第1部 講演「認知症でも働けます、認知症だからできること」

若年性認知症の理解についての講義と、若年性認知症の当事者の方を交えて話し合うことにより、若年性認知症の人のできる力を理解してもらい、企業や事業所として協働できることをイメージしてもらう。



第2部 ワークショップ「企業が認知症に対してできること」

りそな総合研究所の藤原氏をコーディネーターとして、第1部を踏まえて具体的に協働できるアイデアを出してもらう。



1班気づき要素	症状	雇用	対応	居場所
要素数	6	4	2	2
議論のポイント	病気に対する症状への理解 雇用と居場所づくりがポイント 職場の理解 雇用形態 仕事を辞めてからの相談多い 医療・介護・地域との連携 空き家の有効活用、企業との連携 居心地のいい場所が必要 制度・ルールづくりが必要			
2班気づき要素	企業	制度		
要素数	14	6		
議論のポイント	イメージとしては企業が認知症に対してできるか？ 企業の前に国がやること メンタルヘルスと認知症の違い メンタルヘルスはストレスチェックなど法的サポートあり 国としての対応 生活習慣病と同列に			
3班気づき要素	支援	啓発普及	症状	当事者の想い
要素数	9	5	5	1
議論のポイント	いかに支援・広げていくか 企業に対しての案内 どのような職業が向いているのかを明確に 企業に関しては利益団体なので、認知症の方の雇用のメリット			

【参加者】 17名

【まとめ】 当日、第1部に予定していた若年性認知症の当事者の方が体調不良のため欠席したことから、急遽、認知症になって会社の理解と協力を得て働き続けている方のテレビ番組のビデオを教材として活用して進めた。そのため、当初の企画の内容とは違って、主に社員が認知症になったらどう対応すればよいか、雇用し続けられるか等が議論の中心となった。認知症の理解を深めてもらうことはできたが、協働のイメージや具体的なアイデア等には至らなかった。

※別紙チラシ参照、グループワークのまとめ、アンケート結果参照

2. 具体的な取り組みの試行（平成30年1月末現在）

若年性認知症の人に適した仕事や活動について協働できる企業や事業所を開拓することで、以下の具体的な取り組みを行った。

（1）ランチづくりとおもてなし

【協働先】 HiLo's 倶楽部

【場 所】 HiLo's 倶楽部（大阪市阿倍野区 地下鉄「西田辺」）

【経 緯】 若年性認知症の支援として認知症カフェを開催している HiLo's 倶楽部の活動を4月から支援する中で、タックのアートワーク展の共催等を通してよりつながりを強め、HiLo's 倶楽部の場所を活かした活動として、6月からランチづくりを協働して実施することとした。

【目 標】 まずは試行して、可能であれば月に2回、さらに週に1回と増やしていく。

メンバーの主体的な活動とするために、企画段階からメンバーと話し合って決める。

将来的にはメンバーの収入につながるような活動を目指す。

【取り組み内容】

・ 第1回ランチづくり（6月29日）

6月22日木曜日のタック参加メンバーに提案し賛同を得る。具体的なメニュー等を検討する。

第1回ランチ作りには9名のメンバーが参加し、元調理人のIさんを中心に各々が料理の過程で役割を持って主体的に取り組めるようサポートした。楽しく和気藹々と実施できた。

以降、月に2回隔週の木曜日にランチづくりを継続実施し、その間の木曜日には次回のメニューを検討して決定することとした。

・ 7月以降、第2・4木曜日に実施（第1・3木曜日はメニューの検討会）。

・ 回を重ねるごとに慣れて、各々の役割が自然にできるようになり、楽しく、スムーズに進むようになった。

・ 第7回ランチづくり（9月28日）に初めての試みとしてお客様2名を迎える。これまではメンバーとサポーターのみの食事であったが、将来的な目標を目指し『おもてなし』にステップアップした。おいしい料理で喜んでもらえたが、完成が13時半になり待たせることになった。当初からタック（玉造事務所）に集合してから西田辺のHiLo's 倶楽部に移動したため、時間的な制約があり移動が課題であった。

・ 第8回ランチづくり（10月5日）から直接HiLo's 倶楽部に集合できるよう、メンバーの状況に合わせて送迎を支援した。その結果、料理の時間が確保でき、お客様を待たせることなく、ゆったりと食事や後片付け、ミーティングなどができるようになった。

第1・3木曜日に開催日を変更した。

・ 10月以降、第3木曜日を『おもてなし』の日とし、第1木曜日は新しい料理にチャレンジしたり、同じメニューを再度作って改良するなど、継続して実施している。

メンバーは当初の9名から2名減り、新たに2名加わって9名のメンバーで固定して実施している。

【メニュー一覧】

- ①6月29日 牛肉と野菜の炒め物、玉ねぎの丸ごとスープ、ご飯
- ②7月13日 豚肉の生姜焼き、ほうれん草のミモザサラダ、人参シリシリ、味噌汁、ご飯
- ③7月27日 鶏肉のチリソース煮、ポテトサラダ、中華スープ、ご飯、(ピクルス仕込み)
- ④8月10日 鮭と野菜の白ワイン蒸し、コンソメスープ、イチジクと生ハム、ピクルス、パン
- ⑤8月31日 キーマカレー、ローズマリージャーマンポテト
- ⑥9月14日 アジフライ・野菜付け合せ、きゅうりとじゃこの酢の物、味噌汁、ご飯
- ⑦9月28日 鮭と野菜の白ワイン蒸し、グリーンサラダ、コンソメスープ、ご飯
- ⑧10月3日 ヒレカツ・野菜付け合せ、小松菜と油揚げの煮浸し、赤だし、ご飯
- ⑨10月19日 豚肉の生姜焼き、ほうれん草のミモザサラダ、カニの酢の物、味噌汁、ご飯
- ⑩11月2日 酢豚、切干大根ときゅうりの中華風サラダ、中華スープ、ご飯
- ⑪11月30日 ロールドビーフの煮込み、カリフラワーのホットサラダ、味噌汁、ご飯
- ⑫12月7日 ツナ缶のオープンオムレツ、厚揚げと大根の煮物、味噌汁、ご飯
りんごジャム (デザート：アイスクリームのりんごジャム添え)
- ⑬12月21日 クリスマスランチ：骨付きチキンのオープン焼き、コーンスープ、ミニピザ、パン
- ⑭1月11日 お正月ランチ：雑煮、ぶりの照り焼き、紅白なます、いくら乗せ卵、黒豆
デザート：ぜんざい
- ⑮1月18日 酢豚、中華スープ、切干大根ときゅうりの中華風サラダ、ご飯
デザート：餡餅

【基本的な1日のスケジュール】

- 9:00 時間、場所が不安なメンバーに対して、確認の電話連絡
- 9:30～ 途中まで家族が送って来るメンバーと各駅で合流していく。
- 10:10 HiLo's 倶楽部集合
お茶を飲んで本日のメニューの確認
(メニューは第2・4木曜日に決定)
- 10:20～ 買い物班とセッティング班に分かれて、準備開始
(買い物はすぐ近くのマーケット)



10:50 買い物から帰り、調理スタート



12:30 調理完成、盛り付け、テーブルセッティング、おもてなしの日はお客様を迎える

12:40 食事

(お皆様もできるだけメンバーと話しながら食事ができるように工夫)



13:15 片付け、コーヒーの準備

13:45 コーヒータイム ゆっくりと雑談・唄等

14:40 後片付け、帰りの準備

14:50 HiLo's 倶楽部出発

15:00 西田辺発の地下鉄に乗車（個々の状況に応じて、家族と待ち合わせや、メールでやり取り等）

【参加人数】

- ・メンバー 延べ109名
- ・サポート 延べ39名（HiLo's 倶楽部堀田氏と中村の2名を基本として、ボランティアや関係機関の職員が参加）
- ・お客様 延べ15名

※代金として材料費相当額として1食500円を徴収し法人に収入した。

【まとめ・今後の取り組み等】

若年性認知症の支援を模索されていた HiLo's 倶楽部と協働することで、料理ができる居場所の確保と人的支援を得たこと、タックメンバーに元調理人がいて、料理をすることにメンバーの賛同を得たことにより取り組むことができた。

メニューの企画から買い物、調理、片付けまで、メンバーに主体的に関わってもらうことを重視して取り組みを進めてきた。

料理の利点は、買い物に行く、材料を選ぶ、材料を洗う・皮をむく（皮をむく方法も、手でむく、包丁でむく、ピーラーでむくなど多様）、切る（切り方も多様）、混ぜる、こねる、丸める、調味料を図る・合わせる、焼く、炒める、揚げる、盛り付ける、配膳する、食べる等々と多くの過程があり、メンバー個々のできること、得意なこととどこかの過程に参画できることが大きな点。また、共同作業でありメンバーのできないことをお互いに補いながら連帯感が強く生まれる。最後に美味しいものを食べるという大きな楽しみがある。

さらに、お客様をおもてなしすることで、接客の役割も生まれた。

メンバー個々の認知症の症状により、できそうな作業をしてもらいつつ、一つ一つ丁寧に見本を見せたり、指示する等の細かなサポートを行いつつ、できるだけサポート役が手を出さないように心がけて進めたが、会を重ねるに連れ、自然な役割分担もできてきた。料理以外にも、元カメラマンが写真撮影を担当したり、選曲をしてBGMを担当してくれる人ができたりと、活動に広がりがあった。記憶の保持が困難なメンバーが多いので、メニューの企画等の場面では、作った料理や工程の写真をしながら話を進める等の工夫をしている。

また、関係機関（区役所や区社協等）の人にお客様として来てもらうことで、若年性認知症の理解を深め、活動を知ってもらうことができた。

全員が楽しく参加できる活動ではあるが、時には、認知症の進行等により、できたことができなくなったり、精神的に不安定になる場面もあり、個々の状態に応じた支援は必要である。残念ながら2名のメンバーが継続できなくなった。

本助成金事業の終了後、4月からの活動については、HiLo's 倶楽部単独の活動として、HiLo's 倶楽部の財政的及び人的支援を得ながら、将来的には認知症の本人によるレストラン経営を目指して継続実施する。当面の具体的活動としては、収益を生み出していけるよう、完全予約制でお客様の拡大や、料金の設定、メニューの改良、収益をメンバーに分配する方法等の検討を行っている。

(2) 卓球活動の試行

【協働先】 育徳コミュニティセンター（社会福祉法人育徳園）

障害者支援施設アテナ平和（社会福祉法人日本ヘレンケラー財団）

【場 所】 育徳コミュニティセンター（大阪市阿倍野区 地下鉄「西田辺駅」）

【日 時】 平成29年11月16日（木）

【参加者】 7名

- ・タックメンバー5名
- ・家族1名、サポート1名

【経 過】 気軽にできるスポーツとして卓球を検討し、タックの事務所を中心に近隣区で場所の提供先を探す、なかなか見つからない。阿倍野区のランチから情報を得て、障害者支援施設アテナ平和（最寄り駅「JR阪和線美章園駅」）に卓球ができないかと打診した結果、協力を得ることができ、9月から阿倍野区内の認知症の人と地域交流スペースの卓球台を借用して月1回程度の活動を始めた。

ランチづくりに参加しているタックメンバーに卓球を打診したところ、経験者が多くいた。地理的にJR阪和線美章園駅はタックのメンバーの馴染みがない場所であり、移動が課題であるため、ランチづくりを行っているHiLo's倶楽部の隣にある育徳コミュニティセンターの借用を打診し了承を得る。

タックメンバーと検討し、場所は新しい場所よりも行き慣れている西田辺のほうが良いという意見で、育徳コミュニティセンターに決定した。

【目 標】 まずは試行して、可能であれば定期的に実施する。

タックメンバー以外にも拡大して若年性認知症の卓球チームを立ち上げ、運動のできる居場所とする。

【取り組み内容】

- ・当日の朝10時にタックに集合し（直接会場に来る人もあり）、お茶や紙コップ等の買い物し、昼食後西田辺に出発して会場に到着。
- ・午後1時から会場設営。卓球台2台を皆で協力してセットする。ラケットを6個借用。運動靴に履き替えて、準備運動後、卓球開始。
- ・高校で卓球部だった人から本格的にやったことはない人まで、技術の差はあったが、ラリーも続き、言葉も多く出て、笑いながら楽しむことができた。汗をかき上着やセーターを脱ぎながら、声を出して盛り上がったが、少し離れたボールが行くとなかなか追いつかない場面や、急にサーブの仕方が分からなく場面もあった。
- ・運動機能の低下によりなかなか球が当たらない人も、打ちやすいところにピン球がくれば打ち返すことができた。
- ・全ての人が対戦できるようにシャッフルして行った。
- ・休憩の声をかけるまで続けるので、途中で3回ほど休憩時間をはさみ、2時45分まで、笑いながら楽しい雰囲気でした。準備と休憩を除き、正味1時間程度の卓球であったが、いい汗を流し体力的にもちょうどよい時間であった。会場は3台が楽に置くことができ、安全で気持ちよくできた。

参加者の反応は、「また、しよう」と積極的な声が聞かれた。

- ・卓球台を片付けて15時に終了した。

【まとめ・今後の取り組み等】

卓球は天候や季節を問わず、室内で気軽にできる運動で、本格的な経験がなくても、子どもの頃や若いときに温泉や遊びで一度は経験したことがある人が多く、取り組みやすいスポーツである。また、認知症により運動機能の低下や空間失認等の症状があっても、状態に合わせて対応することにより楽しむことができる。

今後は定例で開催できるよう協働先と調整を進める。また、ある程度の卓球の経験があってもどんな人にも対応できるようなサポートが望ましいので、ボランティアの協力者を募る。

形態としては、家族も参加できるような卓球グループとして認知症カフェと連動した取り組みや、小・中学生と一緒に楽しめるような取り組みを検討して試行していく。

(3) 就労支援

【協働先】CC株式会社

【経緯】Fさんが8月末に前職を退職したことを聞く。HiLo's 倶楽部のカフェで本人及び妻から話を聞き、精神的にも落ち込んでいる様子が伺え、ランチづくりへの参加を促す。時間が経過すると再就職はより困難になると判断し、妻と相談して並行して早急に再就職先を探すことにした。若年性認知症の人に適した仕事や活動について協働できる企業をリサーチする中で、6月にヒアリングしたコンビニを数店舗営業し地域活動も行っている企業に相談したところ、清掃業務の求人があり、紹介できることになった。

【目標】本人の働きたいという気持ちを喚起し、会社に対しては病気の理解を得て、まずは気持ちよく仕事ができるような配慮をしてもらえる現場をお願いする。本人が自信を取り戻し、継続して就労できるようなサポートを行う。

【取り組み内容】

- ・8月末、妻から退職して落ち込んでおり、この2ヶ月で語想起障害もかなり進行したことを聞く。タックにはあまり気が進まないようで、ランチづくりや、認知症カフェ「HiLo's 倶楽部」への参加を勧める。
- ・このままでは、再就職が困難な状態になると判断して、CC株式会社の管理部長に認知症の人を雇用してもらえないか、認知症を理解して気持ちよく働ける職場はないだろうかと相談したところ、「清掃の仕事で、現場統括の人は優しくよい対応をしてくれる。一度職場見学に来てもらえばよい」との返事をもらう。
- ・9月9日、HiLo's 倶楽部で話をして、一度職場見学を勧める。ビルの清掃、設営等の仕事の内容を伝え、一緒に行くからと促す。
- ・その後、何度か話しをして、本人の思いを受け止めながら職場見学を促すことを続けた。自信がなく踏み切れない様子が続いたが、9月末には見学に行く決意がついた。会社に連絡して、就労場所の見学に行くことにした。
- ・見学までの間に、履歴書の準備等、できるだけ気持ちに寄り添いながらフォローした。
- ・10月、職場見学に同行する。実際に清掃するフロアを回り、より具体的に仕事の内容が理解

できるように実際に使う掃除機も使って体験してもらった。会社の人に対しては、意味性認知症の症状を説明して理解を求めた。会社からは、清掃の仕事を覚えてもらうまではエリア長が付いてフォローするので安心するよう説明があった。働いてみようと思うならハローワークで紹介状をもらって面接に来てほしいとの説明を受けた。

- ・帰って妻と相談し、11月からお試しで働いてみようと思えることができた。
時間については、相談の結果、月～水曜日は6時から11時、木・金曜日はランチづくりと言語療法に参加するので、6時から9時とすることで本人も納得し、会社にも了承を得た。
- ・面接を経て、11月1日から就労開始した。
- ・以降、本人にはランチ会やカフェで会う際に状況を聞き、会社とは必要に応じて連絡しながら、状況を確認している。
- ・就職から3ヶ月、休むことなく継続できているので、今後も必要に応じてサポートしながら就労の継続を支援する。

柱立て 4：認知症の進行予防のプログラム

I 目的

若年性認知症の人が継続して参加できるように、認知症の進行予防の効果が期待される非薬物療法の取り組みを行う。

II 実施する内容

- 1：アートワーク、アロマセラピー
- 2：脳とからだのワーク
- 3：言語療法

III 実施期間（期間）

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月

IV 実施回数

- 1：月 1 回ぱくすカフェとして 12 回実施、2 カ月に 1 回本人・家族交流会で 5 回実施
年 1 回 展覧会実施 2018 年 2 月 3 日、4 日
- 2：2 週間に 1 回実施 18 回実施
- 3：2 週間 1 回実施 14 回実施

V 効果として考えられること

若年性認知症の人は、介護保険などを導入が難しい。その理由は、通所介護などには高齢者が多いため、家族だけと過ごす時間が長すぎ離れられないなどがあげられる。加えて、高齢者より語義失語の人が多く、発語は保たれている場合もあるので失語と気づかれなかったり、対策が取られていない。家に閉じこもっているだけでは、認知症は進行するため、早期の社会活動の参加や、介護保険など利用が望まれる。

プログラムの実施を行う中で、自信がつく、自己表現が可能になる、就労が継続する、介護保険が利用できるようになるなどの効果がみられ、そのことが進行予防に効果をあげていると考えられる。

認知症の場合、病気としての進行のみでなく、本人・家族共に精神的負担の軽減や、生活しやすくなる、本人のできることが増えることが重要であると考ええる。

VI アートワーク、アロマセラピー

アートワーク指導・介護福祉士：平井美穂 アロマセラピスト・社会福祉士：山本直美

1. ぱーくすカフェ

1) 参加者状況

実施日：第3木曜日（13:00～15:00）

4/20、5/18、6/15、7/20、8/17、9/21、10/19、11/16
12/21、1/18 全10回（2/15、3/15予定）

	平均参加人数		延べ参加人数	
	ワークショップ	カフェ	ワークショップ	カフェ
プログラム参加者	5.3 人	5.4 人	53 人	54 人
サポートスタッフ	1.8 人	1.8 人	18 人	18 人
ボランティア	0.8 人	1 人	8 人	10 人
その他（家族など）	0.5 人	2.1 人	5 人	21 人

2018. 1 月末時点

2) プログラムの特徴

- ・閉じこもりを予防し、認知症になっても安心して出かけていける場所を作る。
- ・他の参加者との交流、積極的なカフェ運営への参加により、役割を持ったいきがいの場とする。
- ・アートワーク、アロマセラピーを取り入れたワークショップを行うことにより、五感への刺激や自己表現の場とする。
- ・介護保険の通所介護などを利用していない人が、カフェの継続した利用を通してグループ活動や自己表現活動に慣れスムーズな介護保険制度利用につなげていく。

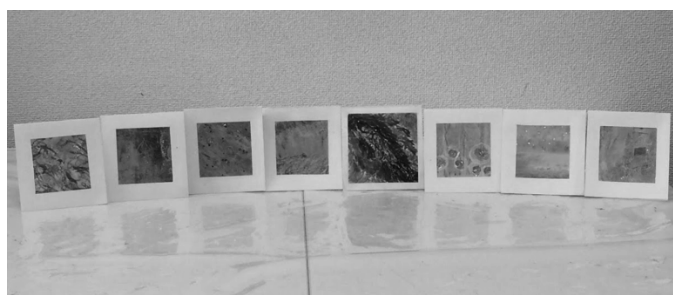
3) プログラムの内容

◎ ワークショップ

- ・アートワーク

ソフトパステル、スパンコールやフェルトなど様々な素材を使い、コラージュ作品を制作する。

好みの色や感触の違う素材を選ぶ、自己決定の場面を多く作り、自己表現することを通して、自己効力感を高めている。場を共有する人とのコミュニケーションを促進し、場の安心感につなげる。



- ・アロマセラピー

好きな香りを選び、その香りを使って匂い袋やルームスプレー、入浴剤などを作成する。

香りによる五感や脳への刺激を行い、他の参加者やスタッフなどと心地よい香りを共有することで、コミュニケーションの促進、自己肯定感、場の安心感につなげる。



- ◎カフェ

参加者自らがコーヒー豆を挽いて淹れ、カップ類などの準備、後片付けまでの一連の流れを協力しながら行う。淹れたコーヒーを一緒に飲みながら交流をはかる。



4) 若年性認知症の人や初期認知症の人に有効であったと思われる事項や事例

・ Tさん

利用当初は、「私、何もできないから」と繰り返し言われ不安な表情をされていたが、回を重ねるにつれ、他の参加者やスタッフに積極的に話しかけ笑顔も多く見られるようになった。ワークショップで他の参加者がどのようにすればよいか迷っている時は、「こうしたらええよ」「ここ持っておいてあげるから」と気遣う場面が多く見られる。役割を持ってカフェに参加することが自信の回復につながっており、通所介護などの利用に向け、カフェ利用が有意義な場となっている。

・ Sさん

利用当初は、緊張した表情、口数が少ない、参加されない日がある、などの様子があった。また、「宅急便が来るから」と終了を待たず、慌てて返る様子が続いていたが、最近では、皆さんと一緒に片付けをしてから帰宅されるようになった。毎回、決まった内容の会話が多かったが、他者が話す話題にも、興味があると入ってこられるようになり、口数も増えてこられた。「みなさんにどうぞ」と、自ら購入した菓子を持参されることもあった。カフェ利用により、場を共有することができるようになり、他の認知症カフェの参加継続や、通所介護利用に向けて試みるきっかけとなった。

・ Cさん

初回、夫と参加され、本人が言葉で自分の気持ちを上手く表現することができず、物事の決定を夫がしてしまう場面が多くみられた。家族と一緒に参加して頂くことで、家族がご本人に与えている影響を知ることができた。また、今後は、夫にスタッフが、ご本人をサポートする様子を見て頂くことで、疾患の特徴に合わせた関わり方を知って頂ける機会となると考える。利用されている言語療法との情報交換ができた為、ご本人への精神的な負担を最小限にとどめ、カフェを楽しんで頂くことが出来た。また、カフェから通所介護利用につながる事ができた。

・ Kさん

当初、夫はご本人にとって、介護サービスの利用は精神的に負担ではないかと心配もあったようである。しかし、カフェで他者との交流、ワークショップを楽しまれるご本人の良い表情を見ることで安心され、積極的に介護サービスを利用できるようになった。

「ここへ来ることを本人が楽しんでいると感じる」「本人の喜ぶ顔が見られる場所なら、どこへでも参加させたい」とのご家族の言葉から、フォーマルサービスに繋いだ後も、インフォーマルなサービスとしてカフェを継続させたいとの家族の思いが分かった。

2. アートワーク展覧会

1) 参加者状況

実施日：2月3日、4日 10:30～15:30

来場者	3日	4日	合計
ご本人	3名	5名	8名
家族	3名	8名	11名
その他	7名	6名	13名
	13名	19名	32名

2) プログラムの特徴

- ・アートワーク作品を展示、作品をはがきに加工して販売し、認知症の人が持つ力を周知することや、当事者、家族が展示を通して作品づくりの成果を再確認し、展示会開催までの過程をサポートと共に協力しながら一緒に作り上げた。

3) プログラムの内容

- ・ぱーくすカフェ、家族会（日々草の会）で制作した作品を額装し展示した。
- ・作者 22名、20点展示した。（額装 40点）
- ・作品をはがきに加工し、当事者のメッセージを添えて販売した。当事者が、商品の袋詰めを行った。
- ・ご本人と話し合いながら、展示会場の設営を行った。
- ・来場した方同士が、お茶を飲みながらゆっくりと話せるよう場をしつらえた。

4) 若年性認知症の人や初期認知症の人に有効であったと思われる事項や事例

- ・ご本人と展覧会を作り上げていくことで、作品を展示しない人も含め、それぞれの役割が持てた。
- ・鑑賞後、ご本人同士、家族同士でゆっくり話ができた。また、サポーターが普段聞けない話を聞くことができ当事者のことを知ることができた。ご家族から、居心地がいいからいつまでもいられると感想を頂き、家族がくつろげる場が提供できた。
- ・来場した方と、当事者、家族が交流することができ、認知症について話ができた。
- ・制作したことを忘れておられても、かいた時のご本人の思いを伝えながら、鑑賞することで、作品に対して良い印象を持つことができた。
- ・過去にアートワークに参加されていた方のご家族とも、展覧会を通じて繋がりが持てた。
- ・認知症が進行し、描くことが難しくなっても、作品が残ることでご家族や友人に、ご本人のお元気な頃の様子を伝えることのできる手掛かりとなることが分かった。
- ・来場した専門職と情報交換ができ、家族にも情報の提供ができた。



3. 脳とからだのワーク

1) 参加者状況

実施日 2017年6月より、2週に1回、12:30～15:00まで実施、合計20回実施(2018年3月)
 参加人数、延べ参加人数:161人(2018年2月まで18回分、本人129人、家族16人、その他16人)
 平均参加人数:8.9人(2018年2月まで18回分、本人7.2人、家族0.9人、その他0.9人)

講師:アレクサンダー・テクニーク教師 堤 奈津子
 スタッフ:1～2名

参加人数

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
日付	6月5日	6月19日	7月4日	7月18日	8月10日	8月21日	9月5日	9月19日	10月3日	10月17日
参加人数	8	8	6	7	6	7	5	7	8	8
家族	2	1	0	0	0	0	0	1	1	2
その他	0	2	1	1	1	0	0	1	2	0
合計	10	11	7	8	7	7	5	9	11	10

回数	11	12	13	14	15	16	17	18	人	
日付	11月7日	11月21日	12月5日	12月19日	1月16日	1月30日	2月6日	2月20日	延べ	平均
参加人数	4	9	8	5	7	9	11	6	129	7.2
家族	1	2	1	1	1	1	1	1	16	0.9
その他	0	1	0	1	1	2	2	1	16	0.9
合計	5	12	9	7	9	12	14	8	161	8.9

2) プログラムの特徴

このプログラムは、『生きがい、楽しみ、自己表現につながることを、身体を動かし声を出すこと』などを通じて、メンバーやその時々グループ全体の調子を見ながら、演劇、アレクサンダー・テクニーク、コネクション・プラクティスなど、講師が学んできたツールの中から毎回即興的に実施しています。

<アレクサンダー・テクニークとは>

アレクサンダー・テクニークは手で身体に触れてワークする方法論でありながら、ボディ・ワークではなく psychosomatic サイコソマティック・ワーク、心身の<学習>であると考えています。

心身はひとつ、分けられるものではないという考えは日本の文化の中では受け容れられやすい考えですが、自分の身心をあらためて自分で学ぶという考えは新しいかもしれません。

身体と心のつながり、そしてあたまと言葉とのかかわり合いを含めた、自分自身の使い方の学習です。

参考: <http://alexander-tech.jp/info>

<コネクション・プラクティスとは>

孤独、対立、格差、暴力、自殺、殺人、テロ、戦争...

今、社会には個人レベルから国際的なものまで様々な断絶があふれ、つながりが失われたことによる弊害が日々報道されています。

企業、学校、地域、家族、自分の内面などを見渡してみた時にも、スムーズな意思疎通ができず、つながりの喪失を感じるような場面は、多々あるのではないのでしょうか。

コネクション・プラクティスは、そんな現代社会に生きる私たち一人一人が、いつでも、どこでも、簡単につながりを取り戻し、互いの個性や人間関係を活かしながら、必要なものを共に満たす道を創造するための「つながりのスキル(技法)」です。

引用: <http://rasurjapan.com/about-connection-practice/>

3)プログラムの内容

主には、以下のような内容を組み合わせています。

- ストレッチ

体ほぐしのためのゴキブリ体操



隣の人の足を自分の足の上に置きマッサージ
もう、誰の足かわからない。人に揉んでもらって痛い



- クッシュボールを使った遊び

- インプロ(即興演劇)ゲーム



クッシュボール

ゴムが放射線状になっている
ボール

当たっても痛くない
つかみやすいのが特徴

「クッシュボールを投げて、名前を呼びましょう」といことも初回は難しかったが、回を重ねるごとに、あまりこだわらず、新しいルールを自ら作っていった。



即興で自分のポーズを決め、それを全員で真似していく。

楽しいポーズに笑いが絶えない。

自分のポーズ何をしようかと考えることに最初は戸惑いがありましたが、回を重ねるごとに、どんどん出てくるようになりました。

緊張していた人も、体を触ると緊張が緩むこともわかってきた。

・自己表現

私を表すコトバ、私のよいところ、好きな食べ物、行きたい場所、今年の目標などを紙に3～5つ書いてみんなの前で発表する時間

「私は○○です」



「私は いい方向に向かっています。」



「私は この集まりが好きです。」

いつも言葉にしないことも、体がほぐれていくと、心もほぐれていくのか、いろいろ出てきます。

・コンタクトインプロビゼーション

人に自分の身体の重さを委ねたり、相手に委ねられたりしながら、そこから生まれる動きを楽しむ。人の身体やその温かさ重みに触れること触れてもらうことで得られる体感を通した、サポートやつながり、安心感を意図とする



- ・マッサージ
- ・リラクゼーション
- ・コヒーランス

脳と心臓を同期させポジティブで安定した心と身体の状態になる方法





人のお腹に頭をのせて、また次の人も頭をのせていくと
魚の骨のように重なりあいました。
一人が笑うと、波のように伝わっていく
そっと、隣の人の手をとる人も

回を重ねるごとに

自由が増し、インプロゲームなどは参加者のみなさんのアイデアで新しいやり方が生まれたりして即興でそれをやってみる、新しい方法を受け入れ楽しむ力に感動します。

もともとタックのみなさんは、共感的でお互いをサポートし合う関係性が出来ておられ、ふと誰かが分からなくなったりする場面や、調子のよくない方が気持ちが落ち込んでしまうような場面でも、自然に助け合ってプログラムを楽しむというグループとして理想的な在り方が見られます。

準備や後片付けなども協力してあっという間に終わってしまう様子には、毎回見惚れてしまいます。ヘルパーさんやご家族、タックのスタッフの方々も一緒に参加して下さることがありますが、立場の違いは感じられず、参加者のみなさん全員で作り上げる時間と場所になっていると思います。これらは、どんなグループワークでも起こることではないので、とても貴重だと感じています。

講師としては

- 「ひとつひとつのワークに参加するかどうか自主性を持って選択する自由」が常にあること、
- 一人ひとりが、まず最初に自分自身が楽で心地よくあることを大事にすること、
- 「正しい間違い」や「いい悪い」「出来る、出来ない」などの評価がない場所であること、
- あたまとところからだの緊張を減らし、いつもとは違うやり方で使うことがよい刺激となって心身の機能を高め維持する働きとなることなどを意図してプログラムを運営。
- 病気があってもなくても、どんな人にも必要なこと(つながり、ふれあい、自己表現、共感、受け入れられること、安全で安心して自由でいられる場所、運動と休息などを満たすことを意図としている。
- 楽しく心地よく緊張の少ない状態で過ごす時間が増えることが結果として心身の機能を高め、進行を遅らせる可能性があるのではないのでしょうか。

期待される効果

- つながり、ふれあい、自己表現、共感、受け入れ、受け入れられる安心で自由な場所など生きるために必要なニーズが満たされることで、二次障害を予防できるのではないかと
- 楽しく心地よく緊張の少ない状態で過ごす時間が増えることが結果として心身の機能を高め、進行を遅らせる可能性があるのではないかと。
- サポートする側が、病気やあたまのことだけでない、その人全体に繋がること。眠っている未知の可能性の方に信頼を置くことで、進行を遅らせるまたは受容のしんどさを軽減させることができるのではないかと。

4. 言語療法

言語療法士 安井美鈴

【実施目的】

対象者の言語機能の維持と社会復帰，家庭内復帰に向けた支援を行う。

【実施内容】

実施期間：2017年9月から2018年3月末まで 月2回 計14回

対象者：2名 男性1名F氏（年齢50代前半 意味性認知症）

女性1名C氏（年齢60代前半 意味性認知症）

・F氏の実施内容

9月より月2回実施。実施時間は10時～11時の1時間

第1回～第3回

- ・ご本人から訓練等に対するご希望等の聴取と言語機能に関する評価を実施した。
- ・聴取したご本人の希望と言語評価結果から訓練目標を設定し訓練計画を立案した。

【訓練目標】

- ・現在の言語機能を維持する
- ・就業に向けた必要な支援や復帰後の就業支援を行う

第4回～第14回

- ・第3回で立案した訓練計画に沿い、訓練を実施した
- ・11月より就業されたため、他職種と連携を取りながら就業継続の支援を行った

・C氏の実施内容

11月より月2回実施。実施時間は11時～12時の1時間

第1回～第3回

- ・付添いのご家族から訓練等に対するご希望等の聴取と言語機能に関する評価を実施した。
（ご本人からは聴取できず）

- ・聴取したご家族の希望と言語評価結果から訓練目標を設定し訓練計画を立案した。

【訓練目標】

- ・ご本人の言語症状や可能な事へのご家族の理解を促す
- ・言語や非言語を使用したコミュニケーション行動の獲得

第4回～第10回

- ・第3回で立案した訓練計画に沿い、訓練を実施した
- ・ご本人の障害や可能な事へのご家族の理解は深まった

柱立て5：連絡会の開催

①目的

事業の進捗管理や支援ケースの検討を行うため

②実施する内容

各取り組みの進捗管理を行い、支援を行った個々の若年性認知症の人への効果や課題等を共有し検討する。

③実施期間（期間） 平成29年4月～平成30年3月

④実施回数 2回

⑤実施場所 当法人内

⑥スタッフ構成 当法人スタッフ3名 連携団体から各1名
進行予防に関わっている講師3名 作業療法士1名 計8名

1. 第1回連絡会

日時：2017年8月17日（木）午後4時～6時

場所：法人事務所

出席：山本直美（ぱーくすカフェ・アロマ担当）

平井美穂（ぱーくすカフェ・アートワーク担当）

中村淳子（料理・仕事をしやすい場所と企業等と協働した仕事担当）

堤奈津子（脳とからだのワーク担当）

沖田裕子

杉原久仁子

議事録要旨

（1）自己紹介を行い、沖田から事業概要の説明を行った

（2）それぞれのプログラムの現状と課題を報告した（進行予防、運営についての課題）

1）アロマ

2）アートワーク

3）体と脳のワーク

4）料理

5）自主活動日

6）言語療法（9月～）

・アロマ、アートワークなどは2か月に1回なので進行予防にどれだけ効果があるのかは、はっきりわからないが、他の参加者との会話などを楽しんでおられる。アートワークでは、「頭が活性化している気がする」と話す参加者がいる。

・手順をふんで作品を作るなどが難しい人がいる。

・カフェに参加する人数が多すぎる。本人が選んでカフェに参加しているわけではなく、タックの延長としてそのまま参加している人が多い。参加者を絞った方が良い。

・脳とからだのワークは手探り状態で始めた。グループの関係性が毎回変わる。ダイナミックな活動を楽しめる人と抵抗がある人がいる。「こんなもんちゃう？」と雰囲気がかわれてしまうような発言がある

人もいて、そんな人には言葉がけを増やしている。背中を合わせて他人に触れるとか床に寝転がるようなプログラムはほとんどの人が受け入れている。リラックスの面が強くなってしまう。「私は〇〇です」と5つの言葉で自分を発表するプログラムは、その人の性格や生き方があらわれていた。

・6月29日から2週間に1回、料理をしている。9名を固定人数として枠組みを作っている。誰かがやめたら、代わりに入ってもらいたい。料理の次の週は、振り返りと次週の献立を考えている。シェフとして動いていただきたと思っていた人は、1回め、2回目は「俺ばっかりにさせる」と言ってイライラしていたこともあったが、3回目から家族に「冒険してきた」と話すなど楽しめている。場に慣れてきたのではないかな。できないことはカムフラージュして対応をしている。課題は人数と移動と回数。人数は6名程度がちょうど良い。

・言語療法は、予定していた人が体力が落ちて来所できていない

・タックの利用は、5月が少し減って、プログラムを始めたらず増えてきた。月、木の体と脳のワーク、カフェ、料理の日の参加が多い。

・料理とカフェの日を一緒にして、参加者の希望でわけていくと、カフェ・料理の人数の問題が解決するのではないかな。

(3) 家族アンケートの結果を沖田から報告した。

(4) 事業全体の報告及び今後の予定として、以下の内容を報告、検討した。

1) 企業セミナー

2) 若年性認知症の本人と家族のための支援 実践講座研修

3) ボランティア・見学の受け入れを促進するために

4) 冊子・報告書の作成

5) 報告会

(5) 来年度の申請に向けて

2. 第2回連絡会

日時：2017年12月16日（土）午前10時～12時

場所：法人事務所

出席：山本直美（ぱーくすカフェ担当）

平井美穂（ぱーくすカフェ担当）

中村淳子（料理・仕事をしやすい場所と企業等と協働した仕事担当）

堀田 （料理担当）

堤奈津子（脳とからだのワーク担当）

沖田裕子

杉原久仁子

議事録要旨

(1) それぞれのプログラムから報告があった。

1) アロマ

2) アートワーク

3) 体と脳のワーク

4) 料理

5) 自主活動日

6) 言語療法 (9月～)

・カフェの中のワークショップとしてアロマを行っており、作業の手順の多いものや複雑なものを作るのではなく、匂い袋をメインに、ルームスプレー、バスボム作りなどを行っている。アロマそのものの効果をメインにしているわけではないので、香りの効果についてははっきりとは分からない。ただ、香りで五感を刺激されることにより、表情や意思表示が明確になっていくこと、ワークショップの穏やかな雰囲気のまま、カフェタイムへの流れを継続して持てるように思う。

少人数になり、一人ひとりの様子をみていくことができ、またカフェタイムでもご自分からいろいろな話をされる場面が多く持てた。

・カフェの中でのアートワークということで、回数が多くないので効果的に深くというのは難しいが、少人数、大人数の効果に違いがある。大人数の場合、ワークショップはやりにくい、仲間としての動きや気遣いがあり、グループとしての良さがある。少人数の場合、一人ずつゆっくり話すことができ、作業しながらも話が聞けるという良さがある。

・人数が多いことでのデメリットは場所との関係も考えられるのではないか。この場所に対して人数が多いということもある。また、人数が多く狭いこととサポートをするスタッフが少ないことで、アートワークとして本来しないといけないサポートができない。空間が広ければ導線などを考慮し、うまいサポートできたのかもしれないが。

・作った作品が商品になって売れていることを喜んだり、目の前で売れていくのを目の当たりにして、当初、男性が多いのでモノづくりはどうなのか？本人の語りの方が大事ではないか？とも思ったが、そういった効果からモノづくりもよかった。初めて参加した人もスムーズに参加できている。他の参加者が熱心に作業されている様子を見て場の雰囲気につられてスムーズなのか？男性が多いことで初めて参加の男性も参加しやすいのか？

・「脳とからだのワーク」では、「参加していてこれが正しいということがない。間違えてもいいということなのかな。正解がないというのがいい。すごく楽しい」と発言している人がいる。

・料理は、6月から初めて12月で12回。開始当初は9人だったが、2人減って、その後新規に1人増え、現在は8人。開催日が第1、3曜日に変更になり、当初からの課題だった移動時間も10月からは直接 田辺に集合することになり時間的な余裕ができた。将来的にはカフェも独立した形でお客さんに来てもらえるようにと考えており、9月からは試行的にお客様をお迎えしている。11人に来ていただいておおむね好評。

・Iさんの就労については、清掃の仕事に就き、マネージャーさんもととてもいい方で、気になることは何でも聞いてきてくださる。本人からは「みんながいいからいいねん」という言葉がきかれる。しかし、STからは言葉の意味が分からない、会話のしづらさが身体的なしんどさとして表現されているのではないかと意見もある。

・自主活動日は、参加人数は減っている。日によっては参加者一人の時もある。

・言語療法は3名が受けている。

・事業の評価をするにあたり、利用していたが来られなくなった人をどう評価するのか？病状が進んだからそれで終わり、では意味がないのでは……。→評価が必要だが、タックの限界もあり、事例をあ

げて評価に組み入れてはどうか

(2) 3月3日 WAM 事業報告会について

一つひとつの事業について報告するという形ではなく、本人たちの声を入れながら発表する、という形を考えている。この形の方で行うことで本人たちの達成感を得られる。活動報告自体は活動報告書で行う。

(3) 「タック等各プログラム活動の参加目標」シート作成について

- ・目標の共有が必要→家族と本人、私たちとの一致が必要ではないか
- ・スタッフが記入→本人と摺合せ→家族とも共有
- ・家族とのズレを摺合せ、今後介護保険を利用していく上でケアプランに慣れていくという意味もある

柱立て6：報告書の作成及び報告会

I 目的

事業成果をまとめ、報告するため

II 内容

1. 報告会

1) 日時：2018年3月3日 13時～16時

2) 参加人数：54人 アンケート回答者 23人

報告会参加者

職種	人
介護福祉関係事業所職員	9
認知症の本人	8
地域包括支援センター職員	7
家族	6
若年性認知症支援団体	6
認知症初期集中支援	5
サポートセンター	5
病院職員	2
障害者関係事業所職員	1
その他	5
合計	54

報告会参加者アンケート

性別	人
女性	17
男性	6
立場(複数回答あり)	
認知症地域支援推進員	5
地域包括支援センター	4
認知症初期集中支援センター	3
ケアマネ	2
認知症の本人	1
家族	1
デイサービス	1
その他	6
研修満足度	
とても満足	12
満足	9
やや不満	1
不満	0
満足、やや満足の理由	
役立つ情報が得られた	17
日頃の生活や活動に役立った	9
スキルアップにつながった	5
他の参加者との交流・情報交換できた	6
その他	3
やや不満の理由	
役立つ情報が得られなかった	1
N	23

3) 内容

①事業概要

②仕事をしやすい場所と企業と協働した取り組みの発表

柱立て3で行った、企業との協働セミナーと料理の取組について発表

③各プログラムの紹介

脳とからだのワークについて、参加した認知症の人にも発表してもらいながら、写真と動画でワークの様子を紹介した。

ぱーくすカフェで行っているアートワークとアロマセラピーについて写真でワークの様子を紹介した。

④就労支援のためのアセスメント表について

平成28年度に作成したアセスメント表を用いて協議した内容について話し、現在変更をガイドブックの作製を行っていることを報告

4) 参加者からの意見

アンケートの提出が参加者の半数しかなかったが、ほとんどの人は「満足」「やや満足」であった。「やや不満」と答えていた人は、認知症の本人であり、報告会の後に相談の予約をして帰られた。感想の中に、社会参加の場を身近で継続していきたくてという声があった。

- ・ タックの活動報告を聞いたときに当市でも活動を頑張ろう！と活力をもらう。
- ・ タックの活動や本人の声が聴けたので貴重な研修だった。私の地域ではまだまだ本人支援の場がなく、これからどういう働きをすればよいか正直不安だが、仲間と一緒に頑張っていけたらと思う。
- ・ 認知症の方、ご家族支援のための具体的活動の形に触れることができたのは有意義だった。
- ・ 当事者の方達の声が聴けて良かった。タック参加者は楽しそう。自身の取り組みにも活用する。

プログラムへの興味が深まったという意見も多かった。

- ・ タックの活動を知ることができとてもよかった。障害者支援で働いているが、二次障害に苦しむ人も多く、「脳とからだのワーク」については、こちらの施設でも使える知識だと思った。
- ・ アレキサンダーテクニークは大変面白く、オレンジパートナーでもやってみたいと思う。個々の表現法とあるのは、素晴らしい。あまり難しくないで実行する。
- ・ アレクサンダーは初めて知った。自身の体をよく知って上手にサポートすることは大事な事。皆さんとても楽しそうで、仲よくされているし、密になって認知症本人さんの声がたくさん聴けて良かった。

2. 報告書の作成

本年度事業をふまえて、以下の4種類の作成となった。

- ①事業全体の報告書
- ②就労支援のためのアセスメント表の改訂版
- ③就労支援のためのアセスメント表のガイドブック
- ④若年性認知症の支援の状況を明記したパンフレット

企業が認知症に対してできること 一緒に考えてみませんか？



若年性認知症の推計は、全国で4万人とも10万人ともいわれています。

国政においては、認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）が策定され、「認知症の本人の視点」の重視や、若年性認知症支援の強化等の取り組みが進められています。

64歳未満に発症した認知症を若年性認知症とし、高齢者とは異なる生活課題—就労や生活費、子どもの教育費等の経済的な問題、主介護者が配偶者となる場合が多く、時に本人や配偶者の親等の介護と重なって複数介護になる等の特徴があることから、居場所づくり、就労・社会参加支援等の様々な分野にわたる支援が必要とされています。

この春より、50人以上の従業員を持つ企業には、メンタルヘルスへの取り組みが義務づけられていますが、“認知症”は“うつ”と見分けにくい症状もあり、両疾患の特徴を知り適切な対処が必要です。

今回のセミナー&ワークショップでは、認知症であっても仕事を続けていける、認知症の人だからこそ提案できることなど、認知症のことをよく知っていただき、企業だからこそできる「認知症に対してできること」を考えるきっかけづくりを目指します。

受講無料

日 時 2017年7月24日（月）午後2時から4時

場 所 りそな銀行梅田支店 プライベートサロン Re ラグゼ セミナールーム

（大阪市北区角田町8番1号 梅田阪急ビルオフィスタワー24階） 地図 裏面参照

カリキュラム

第1部 講演「認知症でも働けます、認知症だからできること」

講師：NPO 法人 認知症の人とみんなのサポートセンター代表 沖田裕子 と 認知症を生きる本人

当法人は、2007年から支援の少ない若年性認知症の方の支援を実施。

大阪府認知症コールセンター及び若年性認知症支援コーディネーターを受託運営。

第2部 ワークショップ「企業が認知症に対してできること」

コーディネーター：りそな総合研究所 リーナルビジネス部長 藤原 明氏

りそな銀行営業サポート統括部オフィサー・コーポレートビジネス部アドバイザー、りそなホールディングスグループ戦略部アドバイザー・オムニチャネル戦略部アドバイザーを兼任。

立命館大学経営大学院客員教授、大阪電気通信大学金融経済学部客員教授。大阪府まち・ひと・しごと創生推進審議会委員。2007年米国国務省 IVLP（インターナショナル・ビジター・リーダーシップ・プログラム）招聘。雑誌『AERA』では「日本を突破する100人」に選出。

※リーナル（REENAL）とは、RESONA+REGIONALの造語で、りそなグループの協働プロジェクト。

定 員 30名（先着順）

裏面の申込書を郵送、または、FAXで送ってください。



平成29年度

独立行政法人福祉医療機構

社会福祉振興助成事業

主催：特定非営利活動法人 認知症の人とみんなのサポートセンター

協力：りそな総合研究所株式会社

企業が認知症に対してできること一緒に考えてみませんか？



申 込 書

FAX : 06-6972-6492

(締切 7 月 14 日)

ふりがな お名前	参加人数	
	人	
貴会社名		
連絡先御住所	〒	
電話番号	TEL	FAX
E メールアドレス		

【注意事項】

※研修中の録音、録画等は一切禁止です。

※個人情報保護法に基づき、この申込み書は受講登録に使用するものであり、他の目的に使用することは一切ありません。

※受講者には、受講票をお送りします。受講定員をオーバーした場合にはご連絡いたします。

＜研修会場案内＞

〒530-0017

大阪市北区角田町 8 番 1 号

梅田阪急ビルオフィスタワー24 階

ビル1 階シャトルエレベーターで

15 階スカイロビーまで上っていただき、

オフィス用エレベーターに乗り換え、

24 階でお降り下さい。

＜アクセス＞

電車でお越しの方

●阪急梅田駅 徒歩約 3 分

●JR 大阪駅 徒歩約 4 分

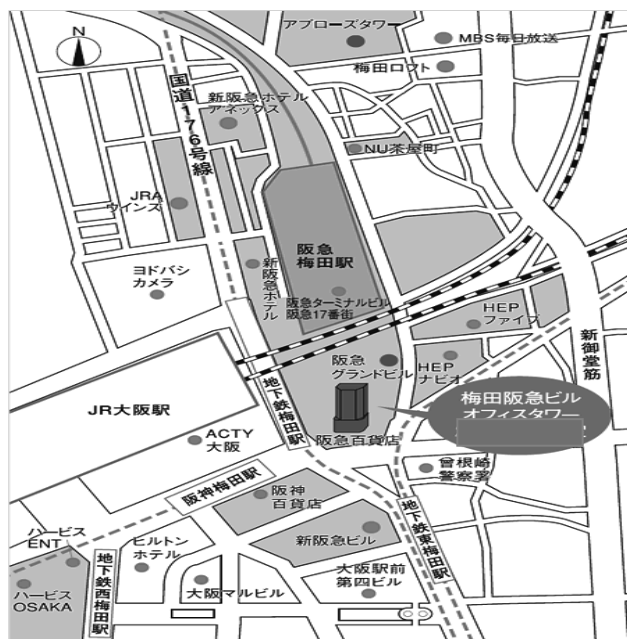
●阪神梅田駅 徒歩約 3 分

●地下鉄御堂筋線梅田駅 徒歩約 2 分

●地下鉄谷町線東梅田駅 徒歩約 2 分

お車でお越しの方

阪急グランドビルに駐車場完備 (有料)



【連絡先】 特定非営利活動法人 認知症の人とみんなのサポートセンター

〒537-0024 大阪市東成区東小橋 1-18-33

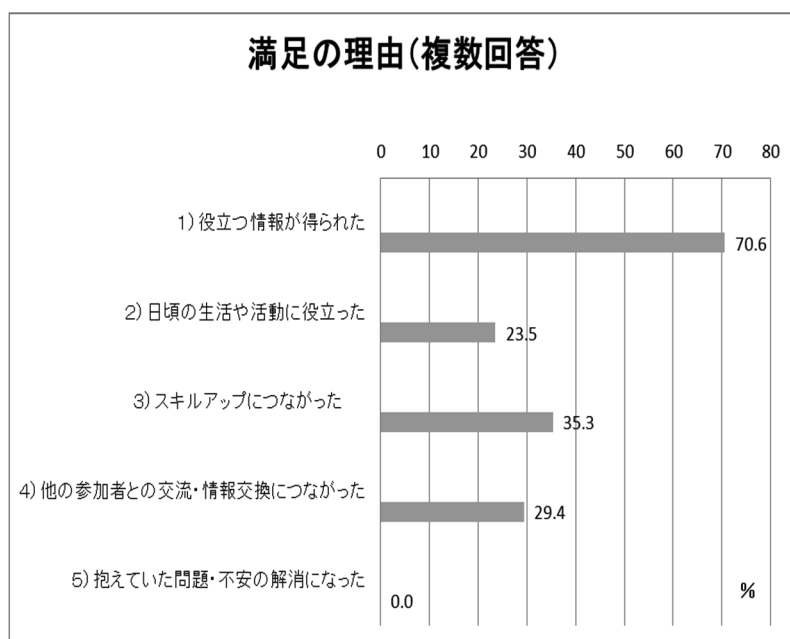
TEL 06-6972-6490 FAX 06-6972-6492

ホームページ : <http://minnanospc.grupo.jp/>

電話でのお問い合わせは、月曜日・火曜日・木曜日・金曜日 10 時から 16 時

	人
性別	
男性	9
女性	8
年齢	
20歳代	1
30歳代	6
40歳代	2
50歳代	4
60歳以上	2
未記入	2
立場	
企業	9
専門職	5
その他(退職者など)	3
研修の満足度	
とても満足	6
満足	9
やや不満	1
不満	0

N=17



満足の理由(複数回答)	
1) 役立つ情報が得られた	12
2) 日頃の生活や活動に役立った	4
3) スキルアップにつながった	6
4) 他の参加者との交流・情報交換につながった	5
5) 抱えていた問題・不安の解消になった	0
不満足の理由(複数回答)	
1) 役立つ情報が得られなかった	1
2) 日頃の生活や活動に役立たなかった	0
3) スキルアップにつながらなかった	0
4) 他の参加者との交流・情報交換につながらなかった	0
5) 抱えていた問題・不安の解消にならなかった	1

感想

- ・りそなの研修かみのホームページで継続的に情報を発信して欲しい。
- ・企業側として必要なこと、知らなかったことを知ることができた。
- ・実践的な説明、事例があり、又スライドが効果的!!藤原さんの進行、まとめが抜群であった!!
- ・他企業の対応等色々な事例を教えてください。
- ・研修・セミナーは聞くことが多いが、久しくグループワークでよかった!!
- ・認知症はこれからも大きな社会的課題の一つです。よろしく!!
- ・若年認知症に関するポイントを多面的に共有することができた。
- ・企業に対する啓発活動が大切であると感じた。オレンジチーム等の
- ・今まで企業の方と話す機会は全くなく、今日参加させていただきワークショップにて活発な意見交換ができとても新鮮で有効的な時間をもつことができました。参加させて頂き、どうもありがとうございました。
- ・藤原先生が会場から出た意見をうまくまとめていただいて情報が整理できました。ありがとうございました。

企業が認知症に対してできること 一緒に考えてみませんか？

グループ 1

病気・症状 ⑥	雇用 ④	医療・介護 ②	対応 ②	居場所 ②
認知症のイメージ	職場の理解（配置換え）	地域での連携、たとえば医療機関・介護施設が必要なのか？	はげます。一緒に行動する。状態の観察。	U R の空き部屋の活用
個人の症状の理解	職場の従業員の理解	地域包括ケアシステムとの連携は？	認知症の方へのケア。言葉かけルールブック	居心地の良い場所の提供
認知症、物忘れだけではなかった！	認知症になった場合の雇用形態の研究口 ピー			
症状の特徴を知り、サポート	個々の必要なサポートがあれば就労が続けられる			
このようなサイン、幾度か経験あるが？				
正確な情報				

議論のポイント				
雇用と居場所。勤務→退職。タックの拡大	病気に対する理解から対応・雇用へとつながる	働かないといけない居場所、企業から。雇用→居場所、次の居場所へと	空き家の活用。弱者の受入をしていく支援負担制度	ルール作り、規定、行政連携
認知症の理解	ルール作り、法案・雇用作り。認知症の知識を皆が持つ。	ルール作り（前に進むのかなど、行政と企業との間）	雇用、居場所。仕事の継続不可。	知識者啓発→対応力
相談のタイミング、退職する前に！	雇用・居場所の大切さ、次の居場所	雇用と居場所（失業保険）傷病手当の重要性！	ルール、マニュアル作り行政と共に	空き家活用→主に居住用
認知症に対する知識向上が大切。ルール作り・法案作りが大切	雇用と居場所がポイント。居場所は企業側の責任	知識をもっていれば対応、寄り添いにつながる⇒ルール・法案作り	空き家活用→リフォーム支援制度構築	認知症に対する認識が重要！雇用面にも影響
認知症は色々な病気だな。知識があれば対応もできる。	雇用と居場所が気になる。居場所必要	雇用と居場所が重要。会社をやめるとなつてからの相談。	自分は医療介護をしたが、マニュアル・ルール作りをしていく	居場所、空き家、弱者受入
寄り添うことが重要。認知症に対応。ルール作り、法案へと。	認知症の知識、啓発活動、法案作り	居住、空き家活用	ルール作り、マニュアル、行政との連携	

企業が認知症に対してできること 一緒に考えてみませんか？

グループ 2

企業 ⑭		制度 ⑥
採用した際の周りの社員の理解	企業を含め国民の方が認知症という病気を理解していくこと	早期発見シートのようなものは、できないのでしょうか
積極的に取り組む姿勢	認知症の症状に合わせた支援ができること。企業とのタイアップで仕事づくりができるのでは？	ストレスチェックのようなことはできないのか。早期発見のために。
多種多様な居場所づくり	本人の気持ちを聴く	病院以外でサポートする制度
認知症サポーター講座って知っていますか？	企業の取組	ストレスやハラスメントの研修は広まっているが、認知症に関して同様にもっと取り組むべき
企業側の対応	企業側の理解の進め方は難しいのでは	認知症の原因となる病気にいろいろな種類があり、治る場合もある。 国・企業がもっと考えるべきと思う
担当（専門）職員の配置	社員の理解	患者数の増加とサポーターの方々の人数が比例していない
法的な企業の責任	認知症は家庭（個人）か企業が	

議論のポイント		
メンタルヘルス・うつ病・認知症、対応が大事。企業ばかりでない。家庭・個人も	企業が病院以外でサポートする団体制度を知って、活用して社員の今後を推奨・支援する。声を傾聴する	認知症 P T に対するサポート。社内で情報共有することが第一歩
認知症を知る。誰もが若くてもなる。支援制度の啓発。	企業・従業員の取り組みむべきことわからない→制度の確立が重要。国も企業も。	ストレスチェックで何かわかったとしても、企業として何をしてよいか。苛立ち。

企業が認知症に対してできること 一緒に考えてみませんか？

グループ3

支援 ⑨		啓発・普及 ⑤	症状 ⑤	当事者の思い ①
「認知症」になってもできることがたくさんある	リンクワーカーのような人の存在が必要	認知症サポーター全国800万人以上いるが、まだまだ正しい知識の理解が深まっていないのでは？	うつの症状と認知症の初期の症状が似ていること	認知症に対する誤解や偏見によって、当事者が必要以上に苦しむことがある
「何ができないか」ではなくて、できることは何かという視点	丹野さんの働く姿をみて、いかにまわりの方のサポートが重要かを再確認	偏見をなくす、認知症を正しく知ってもらう	「うつ」と認知症の症状が似ていること	
企業が出来ることは雇用の確保・受け皿となることだろうが、現実的には難しい	認知症を正しく理解するだけでなく、その知識を活かして当事者をサポートする人がもっと増えれば！	診断された後、今後どうなるかわからないため、正しい情報が必要。どう伝えるのか。	良くなる認知症があることを知らなかった	
早期絶望させない仕組みが必要	認知症になっても、周りの人々（職場とか家族とか）の理解があれば、仕事することができる	症状ごとに適した職や勤務時間などの案内があれば、企業に対しての案内が進むと思います。	さまざまな種類・症状があること	
「早期診断後の関わりが手薄」には驚き＋納得。時期によって対応が変わるんだろうなあ・・・		「認知症」とは病名ではないということ	言葉や行動は忘れてしまいがちだが、感情は覚えているということ	

議論のポイント			
ご本人の努力＋“まわりの人のサポート” こういったことが広まれば、みんな仕事が続けられる	正しい知識をもつということ。それを支援につなげる。	企業に啓発しようとしているが、どうやって関わってあげばいいのか、どう伝えたらいいのか難しい。	啓発といっても個体差がある。企業は営利団体のため、一口に啓発といっても難しい。
少しでもおかしいと思ったら、制度を使っていくべき	支援・普及、企業側の理解が必要。企業にいかに関信していくか	啓発・普及の重要性。	

若年性認知症の 本人と家族のための支援 実践講座



若年性認知症の人や家族を支援するための連続研修です。

当法人の支援経験を元にした、実践的な支援のための講座です。

各講座は選択して受講が可能です。すべての講座を受講された方には、修了証を発行いたします。

日程	研修テーマ	内容
講座 1 2017 年 7 月 21 日(金) 13:30～16:30	若年性認知症の人と家族の 求める支援 本人、家族の体験を聴く	若年性認知症の本人や家族から話を聴きながら、求めている支援について考えてみましょう。
講座 2 7 月 21 日(金) 16:45～18:45	本人の“出来る“を サポートする方法 中核症状を補う	出来ない事に注目するのではなく、出来ないことをサポートして“出来る”ことを増やしていこう！中核症状を補うサポート方法を具体的に学びます。
講座 3 7 月 22 日(土) 10:00～12:00	支援制度の理解を深める	若年性認知症の本人や家族のための支援は、介護保険の使い方にも工夫が必要です。また、障がい福祉制度や医療の活用方法を学んでいきましょう。
講座 4 7 月 22 日(土) 12:30～14:30	本人交流会の進め方 本人同士の支え合いのために	本人同士のコミュニケーションの促進のしかた、居場所の作り方についてお伝えします。
講座 5 7 月 22 日(土) 14:45～16:45	認知症の人の心に寄り添う	認知症による記憶や認知機能の低下に伴い、感情の表現が変わっていきます。サポートする人がいかに理解して寄り添うことができるか考えます。

講師：沖田裕子、杉原久仁子 他（特定非営利活動法人 認知症の人とみんなのサポートセンター）

場所：大阪市社会福祉研修・情報センター 4階 会議室

時間：1 日目 13 時 30 分～18 時 45 分（受付 13 時 15 分から）

2 日目 10 時～16 時 45 分（受付 9 時 45 分から）

参加費：1 講座 5,000 円、（5 回受講 23,000 円 事前振込のみ割引あり）

対象：認知症の人をサポートするすべての人

*受講費は、事前振込をお願いいたします。一旦振り込まれた受講費は、返金はいしません。

*受講費を振り込まれた方には、受講票を発行いたします。

*連続研修をすべて受講された方には、修了証を発行いたします。

*認知症ケア専門士の方は、講座 1 は 3 単位、講座 2～5 は 2 単位の認定が受けられます。

主催：特定非営利活動法人 認知症の人とみんなのサポートセンター

後援：日本認知症ケア学会



独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

【連絡先】特定非営利活動法人 認知症の人とみんなのサポートセンター

〒537-0024 大阪市東成区東小橋 1-18-33

TEL 06-6972-6490 FAX 06-6972-6492

若年性認知症の本人と家族のための支援 実践講座（初回締切7月 14日）

申込書 FAX：06-6972-6492

受講講座に○をつけてください。

受講講座	受講料
すべての講座を受講する	23,000円
若年性認知症の人と家族の求める支援	5,000円
本人の“出来る“をサポートする方法	5,000円
支援制度の理解を深める	5,000円
本人交流会の進め方	5,000円
認知症の人の心に寄り添う	5,000円
合計金額	

振込予定日
月 日

入金口座 ゆうちょ銀行 記号14120-11600071

トクヒ) ニンチショウノヒトトミンナノサポートセンター

お名前 フリガナ	性別	年齢	電話番号
ご住所 〒 ※職場の場合は職場名まで記入		メールアドレス	
認知症ケア専門士 の方のみ	専門士番号		

【注意事項】

※研修中の録音、録画等は一切禁止です。

※一度、入金いただきました受講料は、返金できませんのでご了承ください。

※個人情報保護法に基づき、この申込み書は受講登録に使用するものであり、他の目的に使用することはありません。

<会場案内>

〒557-0024 大阪市西成区出城2-5-20

大阪市社会福祉研修・情報センター

<アクセス>

※JR 大阪環状線・大和路線

「今宮」駅より徒歩約10分

※市営地下鉄・四つ橋線

「花園町」駅（2号出口）より徒歩約15分

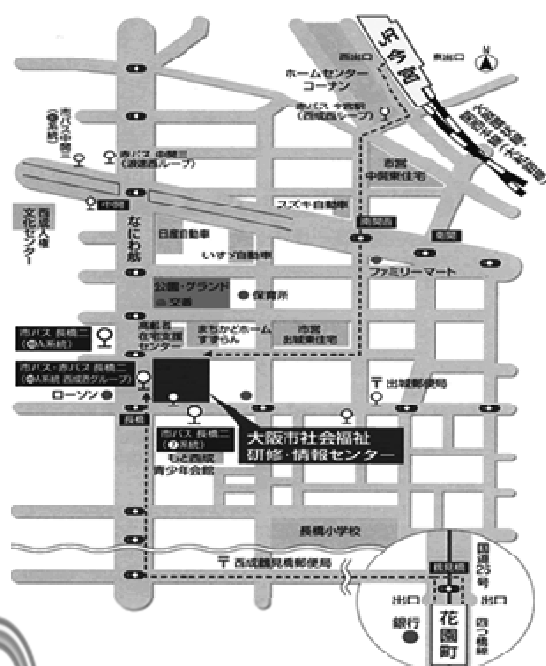
※市バス

「長橋二丁目」バス停すぐ

52系統 なんば～あべの橋

詳しくはホームページを

<http://www.wel-osaka.jp/center/access.html>



独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

若年性認知症の 本人と家族のための支援 実践講座

平成 29 年度 2 回目



若年性認知症の人や家族を支援するための連続研修です。

当法人の支援経験を元にした、実践的な支援のための講座です。

各講座は選択して受講が可能です。すべての講座を受講された方には、修了証を発行いたします。

日程	研修テーマ	内容
講座 1 2017 年 10 月 28 日(土) 10:00～12:00	若年性認知症の人と家族の 求める支援 本人、家族の体験を聴く	若年性認知症の本人や家族から話を聴きながら、求めている支援について考えてみましょう。
講座 2 10 月 28 日(土) 12:30～14:30	本人の“出来る“を サポートする方法 中核症状を補う	出来ない事に注目するのではなく、出来ないことをサポートして“出来る”ことを増やしていこう！中核症状を補うサポート方法を具体的に学びます。
講座 3 10 月 28 日(土) 14:45～16:45	本人交流会の進め方 本人同士の支え合いのために	本人同士のコミュニケーションの促進のしかた、居場所の作り方についてお伝えします。
講座 4 10 月 29 日(日) 10:00～13:00	支援制度の理解を深める	若年性認知症の本人や家族のための支援は、介護保険の使い方にも工夫が必要です。また、障がい福祉制度や医療の活用方法を学んでいきましょう。
講座 5 10 月 29 日(日) 13:45～15:45	認知症の人の心に寄り添う	認知症による記憶や認知機能の低下に伴い、感情の表現が変わっていきます。サポートする人がいかに理解して寄り添うことができるか考えます。

講師：沖田裕子、杉原久仁子 他（特定非営利活動法人 認知症の人とみんなのサポートセンター）

場所：大阪市社会福祉研修・情報センター 4 階 会議室（大阪市西成区出城 2-5-20）

時間：1 日目 10 時～16 時 45 分（受付 9 時 45 分から）

2 日目 10 時～15 時 45 分（受付 9 時 45 分から）

定員 80 名

参加費：1 講座 5,000 円、（5 回受講 23,000 円 事前振込のみ割引あり）

対象：認知症の人をサポートするすべての人

*受講費は、事前振込をお願いいたします。一旦振り込まれた受講費は、返金はいたしません。

*受講費を振り込まれた方には、受講票を発行いたします。

*連続研修をすべて受講された方には、修了証を発行いたします。

*認知症ケア専門士の方は、講座 4 は 3 単位、講座 1～3、5 は 2 単位の認定が受けられます。

主催：特定非営利活動法人 認知症の人とみんなのサポートセンター

後援：日本認知症ケア学会



独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

【連絡先】特定非営利活動法人 認知症の人とみんなのサポートセンター

〒537-0024 大阪市東成区東小橋 1-18-33

TEL 06-6972-6490 FAX 06-6972-6492

若年性認知症の本人と家族のための支援 実践講座（初回締切 10月13日）

申込書 FAX：06-6972-6492

平成29年度2回目

受講講座に○をつけてください。

受講講座	受講料
すべての講座を受講する	23,000円
若年性認知症の人と家族の求める支援	5,000円
本人の“出来る”をサポートする方法	5,000円
本人交流会の進め方	5,000円
支援制度の理解を深める	5,000円
認知症の人の心に寄り添う	5,000円
合計金額	

振込予定日
月 日

入金口座 ゆうちょ銀行 記号14120-11600071

トクビ) ニンチショウノヒトトミンナノサポートセンター

お名前 フリガナ	性別	年齢	電話番号
ご住所 〒 ※職場の場合は職場名まで記入		メールアドレス	
認知症ケア専門士 の方のみ	専門士番号		

【注意事項】

※研修中の録音、録画等は一切禁止です。

※一度、入金いただきました受講料は、返金できませんのでご了承ください。

※個人情報保護法に基づき、この申込み書は受講登録に使用するものであり、他の目的に使用することはありません。

<会場案内>

〒557-0024 大阪市西成区出城2-5-20

大阪市社会福祉研修・情報センター

<アクセス>

※JR 大阪環状線・大和路線

「今宮」駅より徒歩約10分

※市営地下鉄・四つ橋線

「花園町」駅（2号出口）より徒歩約15分

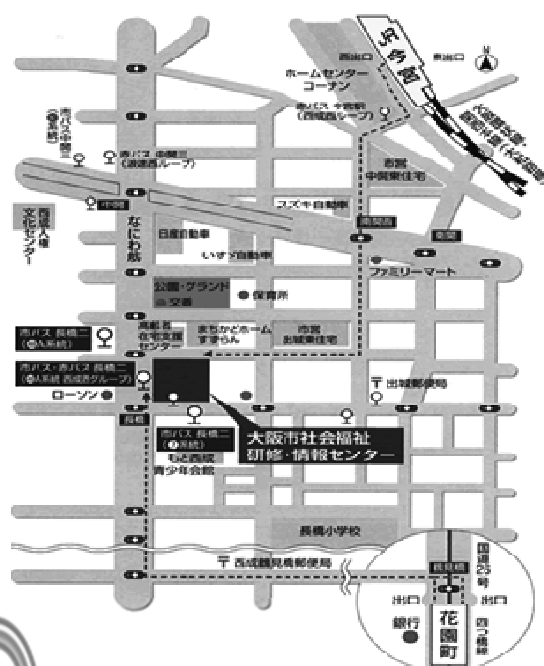
※市バス

「長橋二丁目」バス停すぐ

52系統 なんば～あべの橋

詳しくはホームページを

<http://www.wel-osaka.jp/center/access.html>



独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

報告会 若年性認知症の人のための 場所・生きがいづくり

資料 5

参加者定員
70名

若年性認知症と診断されてもすぐに介護が必要となるわけではありません。

生きがいをもてるような場所、プログラムがあれば、進行も予防できます。

若年性認知症の生きがいづくりの場「タック」の様々な取り組みを紹介いたします。

あなたの身近でも若年性認知症の人を中心にした場所・生きがいづくりをしてみませんか。

<内容>

「タック」のさまざまなプログラムの紹介

発表者：タック参加者の皆さん

講師：アレクサンダーテクニーク教師 堤 奈津子さん

コーディネーター：NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター

代表 沖田 裕子・副代表 杉原 久仁子

○就労支援のためのアセスメント表の紹介

○若年性認知症の人を中心にした仕事の場「タック」の商品展示

○アートワーク作品の展示



日 程： 2018 年 3 月 3 日（土） 13:00～16:00（12:45 より受付）

場 所：エルおおさか 5 階 研修室 2 大阪市中央区北浜東 3-14

（地下鉄谷町線・京阪電鉄「天満橋」駅から西へ 300m）

対 象：どなたでも参加いただけます

参加費：1, 0 0 0 円 認知症の本人は無料です。家族・学生は 5 0 0 円 定員 7 0 名

*認知症ケア専門士（日本認知症ケア学会）3 単位が取得予定です。（申請中）

*お申込みいただいた方は、直接会場にお越しください。受講受付票は発行いたしません。

主催：特定非営利活動法人 認知症の人とみんなのサポートセンター



平成 2 9 年度

独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

報告会 若年性認知症の人のための場所・生きがいつくり

締切り 2/23 金

申込書

FAX：06-6972-6492

ふりがな 氏 名		
職業など	認知症の本人・介護家族・地域包括支援センター職員・介護福祉関係事業所職員 障害者関係事業所職員・病院職員・行政職員 その他()	
所属名(勤務先)		
連絡先	自宅 ・ 所属先	
連絡先住所	〒	
電話番号	TEL	FAX
認知症ケア専門士	専門士番号	

【注意事項】

※研修中の録音、録画等は一切禁止です。

※個人情報保護法に基づき、この申込み書は受講登録に使用するものであり、他の目的に使用することは一切ありません。

※受講者には、受講受付票は送りません。受講定員をオーバーした場合にのみお断りのハガキを送ります。

<会場案内>

〒540-0031 大阪市中央区北浜東3-14 エルおおさか

地下鉄谷町線・京阪電鉄「天満橋」駅から徒歩300m

<アクセス>

- 「新大阪駅」からは…地下鉄御堂筋線(新大阪～淀屋橋)→京阪電鉄(淀屋橋～天満橋)
- 「大阪駅」からは…地下鉄谷町線(東梅田～天満橋)
- 「難波駅」からは…地下鉄千日前線(難波～谷町9丁目)→地下鉄谷町線(谷町9丁目～天満橋)



【連絡先】

特定非営利活動法人

認知症の人とみんなのサポートセンター

〒537-0024 大阪市東成区東小橋1-18-33

TEL 06-6972-6490

FAX 06-6972-6492

ホームページ：<http://minnanospc.grupo.jp/>

月・火・木・金 10時～16時 電話連絡可

休み：祝日・水土日・年末年始

